仙台市文化財調査報告書第300集

仙台城跡
登城路1次調査

—平成17年度　調査報告書—

2006年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第300集

仙台城跡
登城路1次調査

—平成17年度　調査報告書—

2006年3月

仙台市教育委員会

序　　文

慶長５年［1600］、初代仙台藩主伊達政宗が仙台城の縄張り始めを行い、城下に仙台のまちづくりを行ってから四百年余りが過ぎ、仙台市は人口100万人を超える東北地方の中心都市となりました。市の中心部が近代的なビルの林立する都市化の波にさらされていく中にあって、仙台城跡は青葉城や天守台といった愛称で、市街地から最も近い緑豊かな場所として市民から親しまれてきました。

遺跡としての仙台城跡は、平成９年度から15年度まで行われた本丸跡石垣修復工事に伴う発掘調査や平成13年度から始められた総合的な学術調査によって、中世の山城であった千代城、そして伊達氏の居城としての全容が次第に明らかとなってきました。

これらの発掘で新たに判明した複数の時期に渡る石垣構築の変遷や、ヨーロッパ産のガラスや金銅金具等の貴重な出土品などから、仙台城跡は平成15年８月、我が国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、国の史跡に指定されました。これを契機として、仙台城跡の保存管理及び整備に向けて、仙台城跡整備基本計画が策定される等、仙台城跡の様々な魅力を引き出すための取り組みが始まっております。

こうした中で、平成17年度は仙台城跡登城路に関する調査として、沢門跡から本丸石垣下の時の太鼓跡付近にかけての遺構確認のための発掘調査と土塁の測量調査が行われ、城郭として機能していた当時の登城路の解明につながる様々な資料を得ることができました。

今回の調査事業及び、調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からのご指導、ご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げますとともに、本報告書が研究者のみならず、市民の皆様に広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

平成18年３月

仙台市教育委員会
教育長　**奥　山　恵美子**

例　　言

1．本書は、平成17年度仙台城跡登城路１次調査の報告書である。

2．調査は、仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）が担当した。

3．調査及び本書の作成・編集にあたっては、仙台市教育委員会文化財課仙台城史跡調査室および、派遣調査員古川久雄・村尾政人（株式会社島田組）がこれにあたった。

4．報告書の作成は仙台市教育委員会 橋本顕嗣の責任・指導のもとに次のとおり分担した。

本文執筆　　橋本　顕嗣（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ章）

古川　久雄（Ⅲ章－４・５・Ⅴ章）

村尾　政人（Ⅲ章－１・２・３・６・７・８）

編集は橋本・古川・村尾がこれにあたった。

5．各トレンチの遺構実測および土層断面実測は株式会社GIS仙台に委託した。

6．土塁の測量は株式会社東北地形社に委託した。

7．遺構図の平面位置図は平面直角座標系X（日本測地系）を用いており、文中で記した方位角は真北線を基準とし、高さは標高値で記した。

8．遺構略号は、全遺構にS - を付した。（本調査においては他の仙台城跡の調査との区別をするためS－1401からの通し番号を付した。）

9．本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・佐藤：1970）を使用した。

10．調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

目　　次

序　　文

例　　言

Ⅰ　はじめに…… 1

Ⅱ　仙台城跡の概要…… 3

Ⅲ　調査の成果…… 7

１．１トレンチ…… 7

２．２トレンチ…… 8

３．３トレンチ…… 10

４．４トレンチ…… 12

５．５トレンチ…… 13

６．６トレンチ…… 14

７．７トレンチ…… 16

８．８トレンチ…… 17

Ⅳ　土塁の測量調査について…… 21

Ⅴ　まとめ…… 21

写真図版…… 22

Ⅰ　はじめに

１．調査目的・経過

平成17年度仙台城跡登城路１次調査は、遺構確認のための発掘調査として沢門跡南側土塁及び沢門跡推定地平場を、平成17年［2005］12月９日から翌年１月31日まで、沢門跡南側土塁及び中門跡北側土塁の遺構現況測量調査を平成18年［2006］３月１日から同年３月13日まで実施した。発掘調査面積、測量調査面積は、それぞれ青葉山公園として管理されている仙台市有地内の75㎡と1,835㎡である。

調査の主たる目的としては、①調査地点に存在する土塁の現況測量調査及び発掘調査による遺構確認、②登城路にかかわる遺構検出、③沢門にかかわる遺構検出、である。さらに、今後予定されている仙台城跡登城路の整備に向けて、表土から遺構検出面までの堆積層の厚さ、及び近現代の攪乱を受けている範囲等の情報を得ることである。

調査地点の現況は、市道青葉城線に沿った歩道脇の林及び草地で、各所の地表上に径50cm大の石材が点在している。地形的には青葉山丘陵北斜面の急傾斜地であり、標高は60m～93mである。

発掘調査区は沢門跡南側土塁のうち東西方向の土塁に１～３トレンチ、南北方向の土塁に４～７トレンチ、南北方向の土塁北側の沢門跡推定地の平場に８トレンチの調査区をそれぞれ設定した。

調査は、年末年始の歩行者に対する安全管理の面から、12月中は１～３トレンチ及び８トレンチの調査を行い、１月から４～７トレンチの調査に着手し、調査が完了したトレンチから順次埋め戻しを行うこととした。12月９日より、３トレンチから安全フェンス設置及び表土の掘削を開始し、12月12日からは１・２トレンチの安全フェンス設置と表土掘削を開始した。精査の結果、１～３の各トレンチで、遺構及び整地層を検出した。８トレンチについては12月16日にフェンス設置を行い、12月21日から表土掘削及び精査・遺構検出作業を開始した。１～３トレンチのトレンチ全景撮影及び実測は12月27日までに終え、12月28日には３トレンチの埋め戻し及びフェンスの撤去を行い、12月中の調査を終了した。残りの４～８トレンチの調査は１月５日、８トレンチの調査から再開し、１月６日に残りの４～７トレンチのフェンスを設置し、１月10日から表土掘削を開始した。精査の結果、４～８の各トレンチで遺構及び整地層を検出した。なお、４～７トレンチにおいては調査区にかかる地表に露出していた石材については原位置を保っていないことが判明した。４～８トレンチについては１月25日までにトレンチ全景撮影および実測を終え、１月31日に埋め戻し・フェンス及び機材の撤収を完了した。

土塁測量調査は、３月１日から作業を開始し３月13日に終了した。

２．調査要項

⑴　遺跡名称　　仙台城跡（宮城県遺跡地名登載番号01033　仙台市文化財登録番号C－501）

⑵　調 査 地　　仙台市青葉区川内地内

⑶　調査主体　　仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

⑷　調査担当　　文化財課　　課　長　　阿部　　功

仙台城史跡調査室長　　金森　安孝

主　任　　熊谷　俊朗

主　任　　渡部　　紀

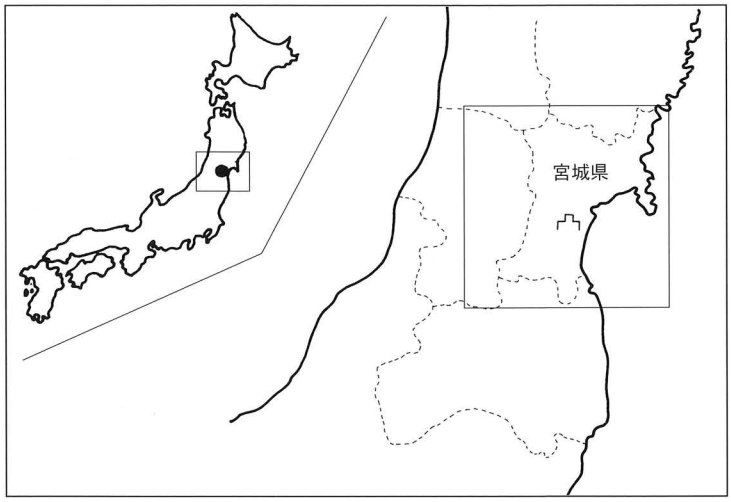
主　事　　鈴木　　隆

文化財教諭　　橋本　顕嗣

派遣調査員　　古川　久雄・村尾　政人（株式会社島田組）

⑸　調査期間　　平成17年12月９日～平成18年３月13日

⑹　調査面積　　75㎡（発掘調査）、1,835㎡（土塁測量調査）



城館跡		15	茂庭西館跡	窯跡		43	西台畑板碑群	58	山田条里遺跡
1	仙台城跡	16	茂庭けんとう城跡	29	荒巻杉添窯跡	44	長町駅裏古碑	59	富沢遺跡
	天然記念物青葉山（網かけ部分）	17	富沢館跡	30	杉添東窯跡	45	宅地古碑群	60	山口遺跡
2	若林城跡	18	沖野城跡	31	五城中学校北窯跡	46	古峯神社板碑	61	下ノ内浦遺跡
3	北目城跡	19	日辺館跡	32	与兵衛沼窯跡	その他の中・近世の主な遺跡		62	六反田遺跡
4	西館跡	20	今泉遺跡	板碑・石碑		47	山田団地東南遺跡	63	元袋遺跡
5	茂ヶ崎城跡	21	小館（古館）跡	33	燕沢蒙古の碑	48	梨野Ａ遺跡	64	下ノ内遺跡
6	小鶴城跡	寺院・墓所		34	東昌寺裏経石出土地	49	仙台東郊条里跡	65	伊古田遺跡
7	郷六城跡	22	臨済院跡	35	瀧不動尊文永十年板碑	50	カナクソ遺跡	66	王ノ壇遺跡
8	葛岡城跡	23	林子平墓	36	郷六大日如来の碑	51	南小泉遺跡	67	皿屋敷遺跡
9	郷六御殿跡	24	経ケ峯伊達家墓所	37	大梅寺建武の碑	52	養種園遺跡	68	大野田古噴群
10	国分鞭館跡	神社		38	郷六建武碑	53	御堂平遺跡	69	欠ノ上Ｉ遺跡
11	南目城跡	25	東照宮	39	川内古碑群	54	町田遺跡	70	高田Ｂ遺跡
12	谷地館跡	26	大崎八幡宮	40	片平仙台大神宮の板碑	55	北前遺跡	71	八ツ口遺跡
13	茂庭大館跡	27	亀岡八幡宮	41	馬越石塚	56	杉土手（鹿除土手）		
14	峯館跡	28	熊野新宮社宿坊跡	42	蛸薬師古碑群	57	山田上ノ台遺跡		

第１図　仙台城跡と周辺の遺跡

Ⅱ　仙台城跡の概要

1．仙台城跡の地理的環境と現況

仙台城跡は仙台市街地の西方に位置し、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている。青葉山丘陵は東を流れる広瀬川に向かい迫り出し、広瀬川とその支流の竜ノ口渓谷の浸食により高さ70mほどの断崖を形成しており、その丘陵上の平場（標高115～117m）に仙台城の本丸は位置する。本丸の規模は、東西245m、南北267mを計り、南側は落差約40mの竜ノ口渓谷、東側は広瀬川に落ちる高さ約70mの断崖に守られた天然の要害となっており、比較的傾斜の緩やかな本丸北側には約17mの高さを有する石垣が築かれている。尾根続きとなっている本丸西側には御裏林と呼ばれた森林が広がり、貴重な自然が残るために国指定天然記念物青葉山となっている。御裏林跡では、３条の大規模な堀切などが確認されている。本丸跡の麓部の河岸段丘には二の丸跡と三の丸跡が位置しており、二の丸跡は仙台上町段丘面、三の丸跡は仙台下町段丘面と高度を下げている。蛇行する広瀬川に西から二本の大きな沢が走り、この沢に挟まれ御裏林を背にした場所に二の丸跡が位置する。二の丸跡東側に位置する大手門跡付近には、約９mの高さの石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和42年に復元されている。さらに低位に位置する三の丸跡は、外郭を水堀と土塁に囲まれ、門跡付近には石垣が残存している。三の丸跡の東側、河岸段丘の最も低位に位置する追廻地区の広瀬川護岸部分には、260mに及ぶ石垣が残存している。

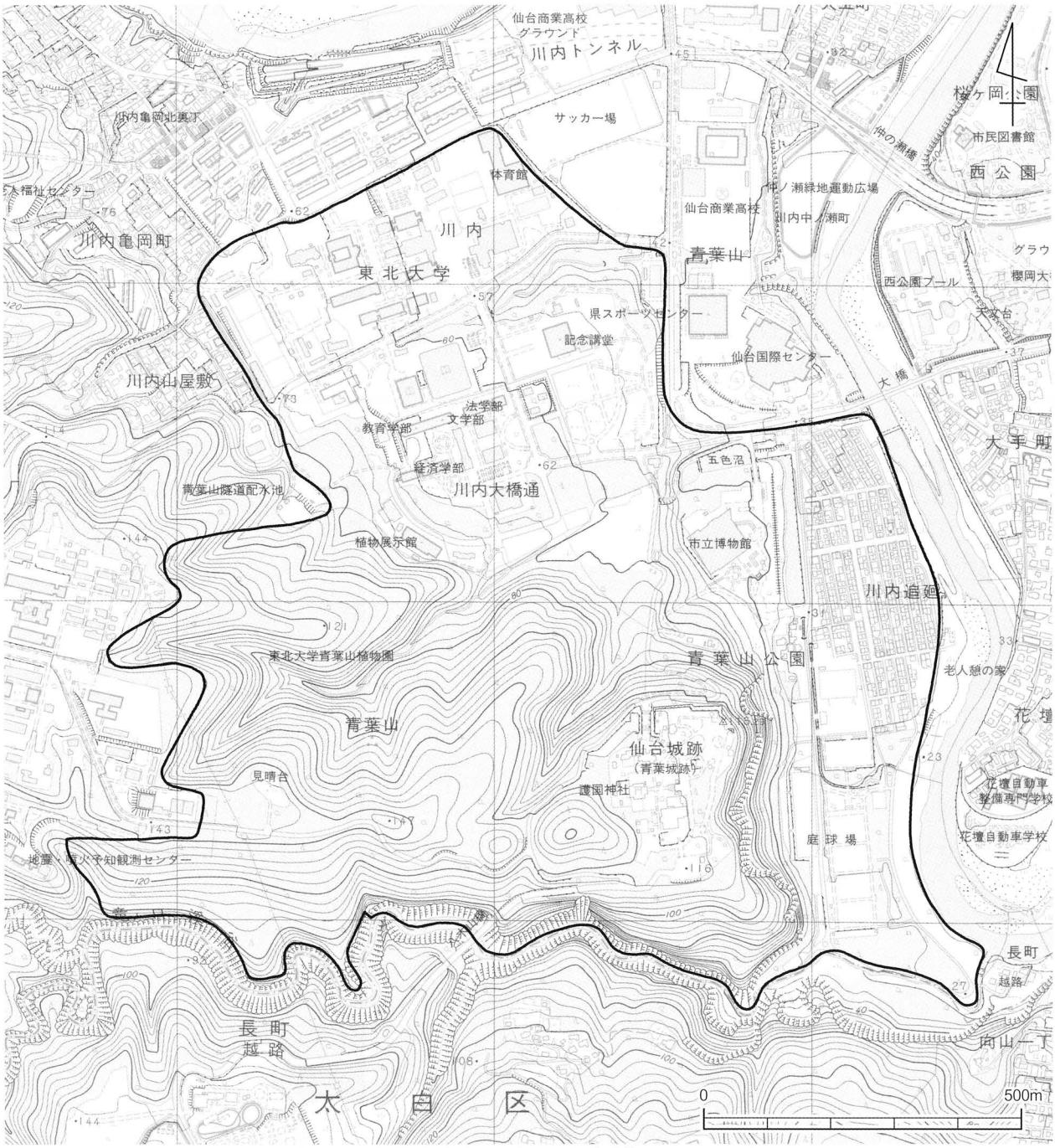
2．仙台城跡の歴史的背景

仙台城は、初代仙台藩主伊達政宗によって造営された城である。関ヶ原の戦い直後の慶長５年［1600］12月24日、城の縄張りが開始され、翌年１月から普請に着手、工事は慶長７年［1602］５月には一応の完成をみたとされている。築城当初は「山城」である本丸を中心とする城郭であったが、政宗の死後、二代藩主忠宗が山麓部に二の丸の造営を開始する。寛永年間以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸・勘定所・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。残された絵図などからみると、本丸への登城路は、大手門を通って中門を経て本丸詰門に至るものと、巽門、清水門、沢門を通るものがある。

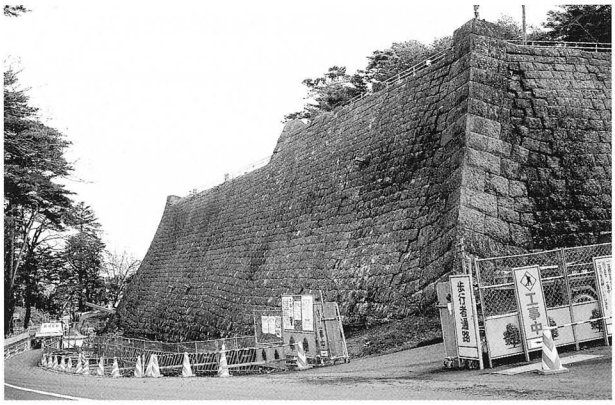
絵図や文献などによれば（註１）、本丸には詰門を入った東側に天皇家や将軍家を迎えるための御成門があり、華麗な障壁画や欄間彫刻に彩られた大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖面に造られた懸造、さらには能舞台・書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって造られた桃山文化の集大成といえる建物群が威容を誇っていたと考えられている。西脇櫓・東脇櫓・艮櫓・巽櫓は三重の櫓であったが、正保３年［1646］４月の地震によって倒壊したとする記事がみられ（註２）、以後復興されずに明治を迎えたものとされている。

本丸の建物群は江戸時代の度重なる災害に加え、明治維新後の取り壊しなどにより失われ、二の丸の御殿群も明治15年［1882］の大火によって焼失した。唯一仙台城の面影を伝えていた国宝の大手門及び脇櫓も昭和20年［1945］７月、太平洋戦争による米軍の空襲によって焼失した。現在では、本丸北壁や随所に点在する石垣、本丸西側の堀切、三の丸の周囲を囲む堀と土塁などが往時の仙台城を偲ぶ貴重な遺構となっている。また、伊達氏による仙台城築城以前にこの地域をおさめていた国分氏の居城「千代城」に関する16世紀代の文献記録も残っており（註３）、中世山城が存在していた可能性も指摘されている。

第２図　焼失以前の大手門と脇櫓（昭和10年頃）



第３図　仙台城跡（現況地形図と遺跡範囲・1/10,000）



第４図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣
解体修復工事前（北西から）

第５図　仙台城本丸現存（Ⅲ期）石垣
解体修復工事前（北東から）

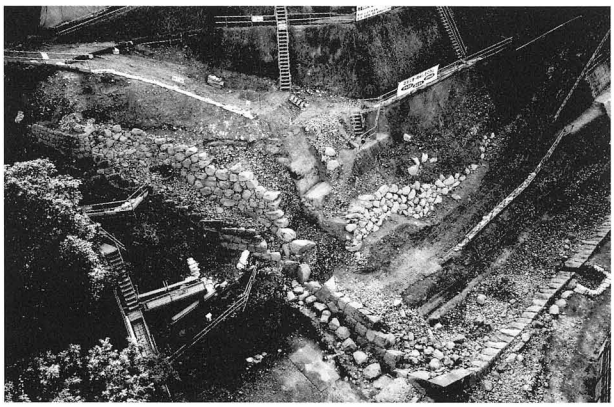
３．仙台城跡の発掘調査

仙台城跡のこれまでの調査には、昭和58年［1983］から継続的に実施されている東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査（註４）と、仙台市博物館の新築工事に伴って昭和58･59年［1983･1984］に実施された三の丸跡の発掘調査（註５）があり、本丸跡では石垣修復工事に伴う発掘調査が第１次発掘調査である。

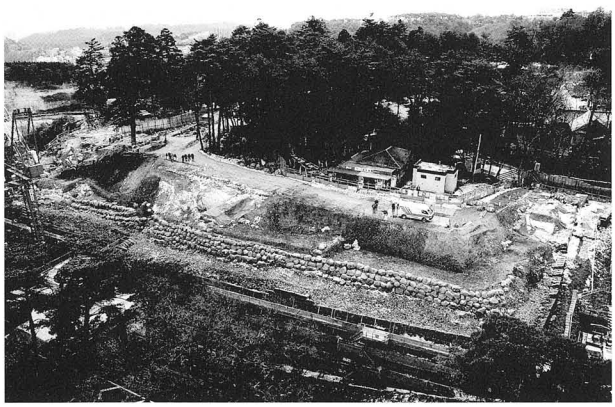
本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点から石垣修復工事が平成９年［1997］度から実施されている。（註６）この石垣修復工事に伴う本丸１次発掘調査は、平成９年［1997］７月から石垣解体に先行する事前調査と、翌年10月から開始した解体工事と並行する発掘調査からなっている。解体工事は平成12年［2000］９月に石材9,106石と、Ⅱ期石垣124石の解体をもって終了し、石積工事を同年12月から開始し、平成16年［2004］３月に工事が終了した。

石垣解体に伴う発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より二時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣基部の調査や石垣断面構造の記録化により、Ⅰ期からⅢ期までの石垣の変遷や構造を確認した。石材調査では各種の刻印や朱書、墨書などを多数検出し、矢穴や石材加工技術の変化も確認している。石垣は表面の「石積み」様式の変化とともに、背面の土木工法の変容が顕著であり、発掘調査で石垣背面の土木工事の痕跡を考古学的な手法によって層位的に精査し、盛土の重複関係や採集遺物の分析からみた石垣変遷を、文献調査との照合により大別している。築城期には、旧地形や中世山城「千代城」の縄張りを利用して斜面を切り土しながら石垣を構築（Ⅰ期）し、地震によりこの石垣が倒壊した後、築城期の石垣形状を一新する修復工事が行われて石垣が再構築（Ⅱ期）され、その後の地震によりこのⅡ期石垣も倒壊し、現存石垣に全面改築（Ⅲ期）されたとして検討を重ねている。（註７）

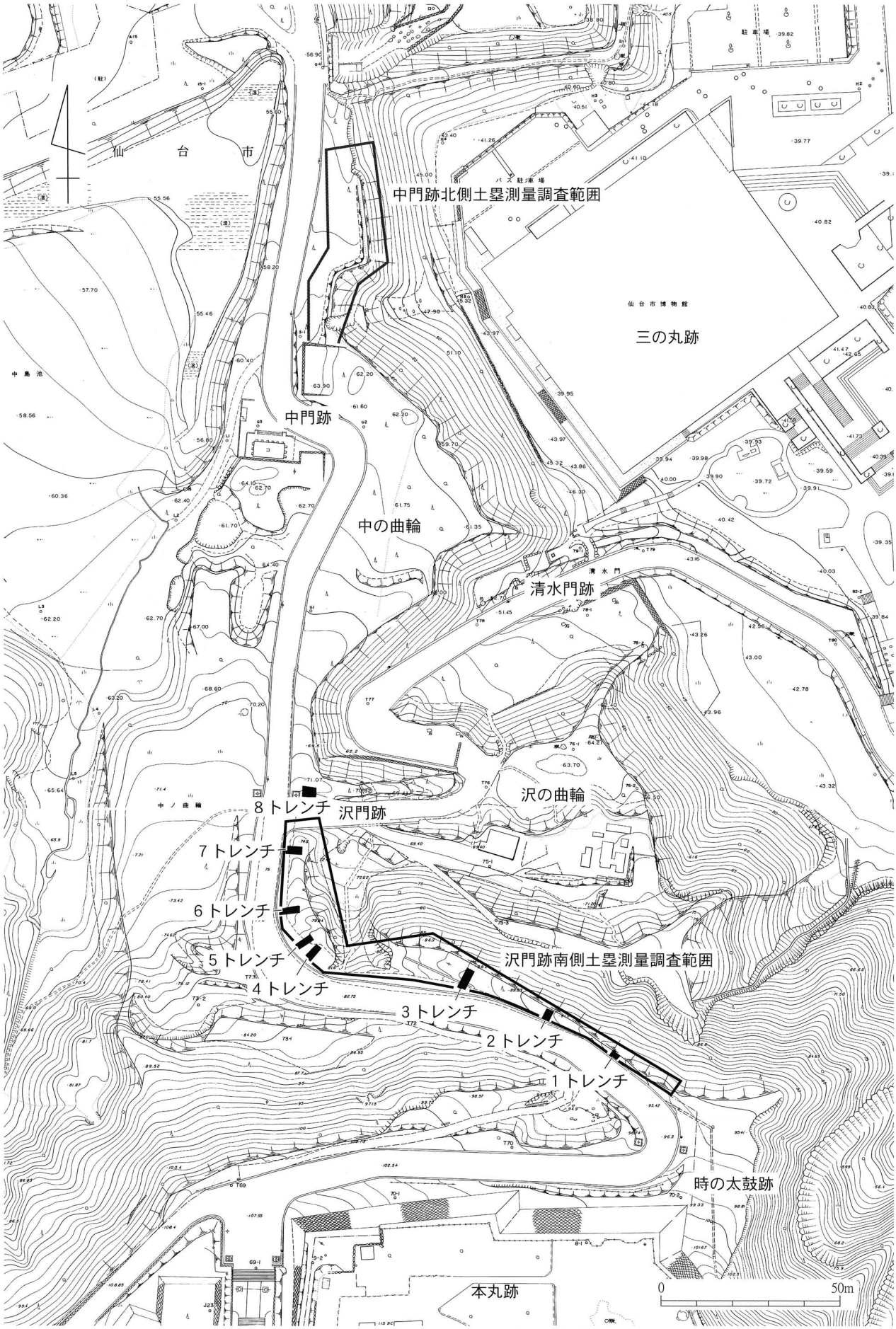
註１　『仙台城下絵図』（寛文４年［1664］宮城県図書館蔵）や『肯山公造制城郭木写之略図』（四代藩主綱村時代、17世紀後半（推定）宮城県図書館蔵）には本丸御殿の建物群が描かれ、『貞山公治家記録』にも大広間の記事が散見できる。建物群の考察については、佐藤巧「仙台城の建築」（仙台市教育委員会『仙台城』1967）・「仙台城館および周辺建物復元考」（仙台市博物館『調査研究報告第６号』1986）・伊東信雄「仙台城の歴史」・三原良吉「仙台城年表」（仙台市教育委員会『仙台城』1967）などがある。
註２　義山公治家記録、正保３年［1646］４月28日條
註３　貞山公治家記録、慶長５年［1600］12月24日條
註４　東北大学埋蔵文化財調査年報１～17（東北大学埋蔵文化財調査センター1985～2002）
註５　発掘調査報告書『仙台城三ノ丸跡』（仙台市教育委員会1983）
註６　仙台城跡石垣修復等調査指導委員会（平成13年度に仙台城石垣修復工事専門委員会と改編）資料・議事録（仙台市建設局1997～2003）
註７　本丸１次発掘調査成果に係る主な参考文献　金森安孝「仙台城本丸跡の発掘調査」（『考古学ジャーナル442号』1999）・金森「仙台城本丸の発掘と出土陶磁」（『貿易陶磁研究No.19』1999）・金森/我妻仁「仙台城本丸跡　築城期及び修復石垣の発見」（『考古学ジャーナル456号』2000）・我妻「仙台城本丸跡石垣の背面構造と変遷」（『宮城考古学第２号』2000）・金森「仙台城本丸跡石垣修復に伴う発掘調査」（『日本歴史第626号』2000）・我妻「仙台城本丸跡石垣における階段状石列の構造と役割（予察）」（『宮城考古学第３号』2001）・金森/我妻「仙台城本丸跡Ⅲ期石垣の発掘調査－現存石垣の構築技術－」（『考古学ジャーナル474号』2001）・金森/根本光一「仙台城石垣の石材調査」（『考古学ジャーナル484号』2002）・伊藤隆「仙台城石垣の石材調査」（東北芸術工科大学『石垣普請の風景を読む』2003）・金森『仙台城本丸跡、１次調査 第４分冊 石垣図版編』（仙台市教育委員会 2004）



第６図　本丸北壁石垣北東角部
旧石垣（Ⅰ・Ⅱ期）検出状況（北東から）



第７図　本丸北壁石垣背面
階段状石列検出状況（北西から）



第８図　仙台城登城路周辺の地形と調査地点位置図（1/1,500）

Ⅲ　調査の成果

各調査区が離れているため、近接する４・５トレンチを除いた基本層序は、統一せずに調査区ごとに記載する。

１．１トレンチ

今回の調査地の中では最も南に位置する。調査区は北東側へ急激に落ちる崖面と南東側の市道青葉城線に挟まれた狭い平坦部に、2.5m×2.0mのトレンチを設定した。周辺には石垣及び石組側溝に使用された可能性のある石材が散乱していた。

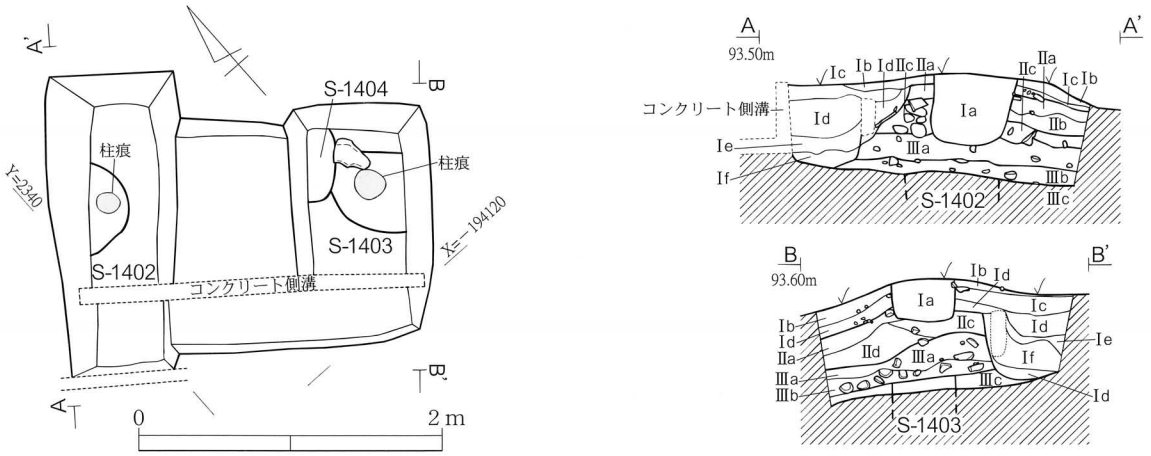
(1) 層序

層序は大きく分けてⅠ層(表土・攪乱)、Ⅱ層(盛土)、Ⅲ層(整地層・遺構埋土)の３層を確認した。Ⅰ層の表土・攪乱には多くの円礫(径10～15cm大)を含んでいる。Ⅱ層はややしまりのある明黄褐色細砂土を主体とする。最下層からは残存状態が良好な瓦片が出土した。Ⅲ層は硬くしまった黄褐色粘質土で、ほぼ水平の堆積が確認された。土層内には地山起源の黄褐色土・岩盤を人為的に径0.5～１cmの大きさで砕いた細片が混入されていることから、基盤整備等の整地層と考えられる。

(2) 遺構と遺物

S-1402（ピット）　調査区の北西側にてピットの南東側半分を検出した。全容は不明であるが、不整な楕円形と考えられる。ピット内の南東側にて小規模の柱痕を確認した。直径が0.6m、柱痕の直径は0.18mを測る。整地層であるⅢc層を切り込んでおり、埋土内より瓦小片が出土した。

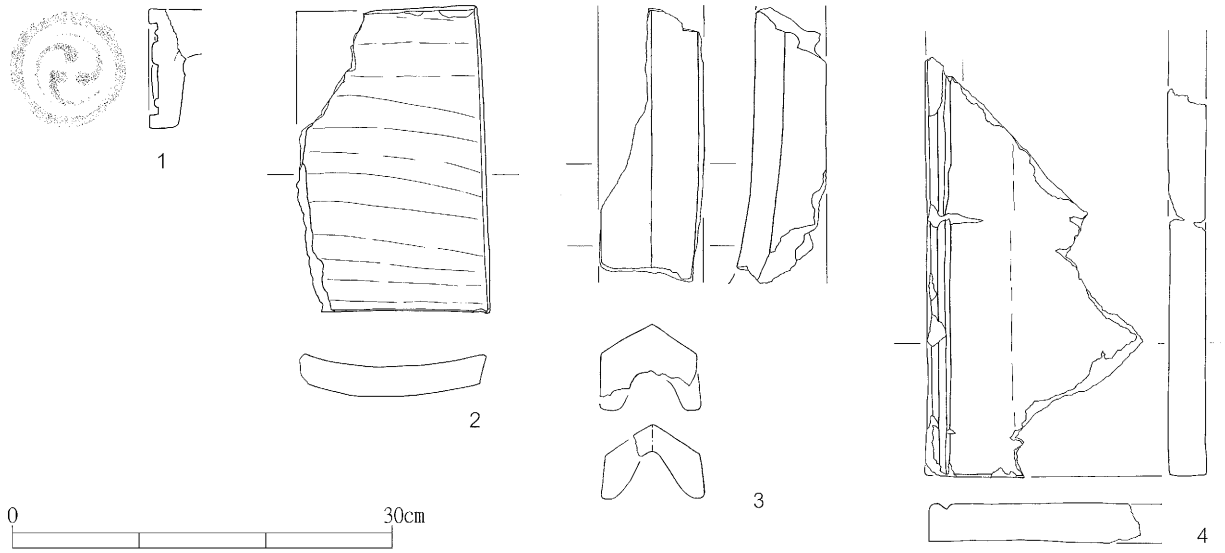
S-1403（ピット）　調査区の南東側にて北側半分を検出した。半分のみの検出であることから全容は不明であるが、不整な楕円形と考えられる。ピット内の北側中央にて柱痕を確認した。直径0.5m、柱痕の直径は0.2mを測り、整地層であるⅢc層を切り込んでいる。当ピットは北側に近接するS-1404に切られている。



第９図　１トレンチ平面・断面図（1/50）

第１表　１トレンチ土層註記表

遺構	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
	Ⅰa	10YR3/1	黒褐色	細砂質土	なし	なし	攪乱埋土、円礫（径15～20cm大）を多く含む。
	Ⅰb	10YR4/1	褐灰色	細砂質シルト	ない	なし	表土（腐植土）。
	Ⅰc	10YR7/6	明黄褐色	細砂粘質土	ややあり	なし	粘土ブロック含む。現代側溝の掘方埋土、表土。
	Ⅰd	10YR4/1	褐色	細砂質土	ややあり	なし	旧側溝掘方内埋土及び基底部客土。
	Ⅰe	10TR6/6	明黄褐色	細砂質土	あり	なし	旧側溝埋土、円礫（径5cm大）を多く含む。
	Ⅰf	10YR3/2	黒褐色	細砂質シルト	あり	あり	10YR4/3にぶい黄褐色細砂質粘土を少量含む。
	Ⅰg	10YR7/6	明黄褐色	細砂粘質土	ややあり	なし	粘土ブロック含む。現代側溝の掘方埋土、表土。
	Ⅱa	10YR5/2	灰黄褐色	細砂質土	あり	あり	コンクリート側溝時の表土及び掘り方埋土。
	Ⅱb	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂質粘土	あり	あり	円礫（径10～15cm大）を多く含む。
	Ⅱc	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	あり	あり	地山の岩盤ブロック2.5Y8/4淡黄色シルト（径0.5cm大）を少量含む。円礫（径3～5cm大）を少量含む。
	Ⅱd	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	あり	あり	盛土、礫（径2cm大）、瓦片を含む。
	Ⅲa	10YR6/6	明黄褐色	粘質シルト	あり	あり	整地層①。地山岩盤ブロック2.5Y8/4淡黄色シルト・10YR7/6明黄褐色シルト（径0.5cm大）を少量含む。
	Ⅲb	10Yr6/6	明黄褐色	粘質シルト	あり	あり	整地層②。地山岩盤ブロック2.5Y8/4・10YR7/6（径0.5cm大）を少量含む。
	Ⅲc	10YR7/6	明黄褐色	粘質細砂土	あり	あり	整地層③。地山岩盤ブロック2.5Y8/4・10YR7/6（径2～5cm大）を多く含む。瓦片径2cm大を少量含む。
S-1402		10YR6/4	にぶい橙色	粘質シルト	あり	あり	ピット掘方埋土内には地山の岩盤ブロック2.5Y8/4淡黄色シルト、10YR7/6明黄褐色シルト（径2～5cm大）を含む。柱痕埋土は10YR5/3シルトである。
S-1403		10YR7/4	にぶい橙色	粘質シルト	あり	あり	ピット掘方の埋土内には岩盤ブロック2.5Y8/4淡黄色シルト・10YR5/3明黄褐色シルト（径2～5cm大）を多く含む。柱痕は確認できなかった。
S-1404		10YR6/4	にぶい橙色	粘質シルト	あり	あり	ピット掘方埋土内には岩盤ブロック2.5Y8/4淡黄色シルト・10YR5/3にぶい黄褐色シルト（径2～5cm大）を含む。柱痕埋土は10YR5/3シルトである。



第10図　１トレンチ出土遺物実測図（1/6）

第２表　１トレンチ出土遺物註記表

図版番号	種　類	遺物番号	遺構・層位	重さ（kg）	特徴（計測値の単位はcm）
第10図　1	軒桟瓦	8	Ⅱ	(0.22)	三巴文、焼成：良好、胎土：密、瓦当径9.4、長さ（2.9）、厚さ2.2
第10図　2	熨斗瓦	29	Ⅲ	(1.20)	三辺、焼成：良好、胎土：密、長さ24.4、幅（15.1）、厚み2.5
第10図　3	駒瓦	181	Ⅲ	(0.54)	長さ（21.9）、幅（8.3）、高さ（7.1）
第10図　4	塀平瓦	185	Ⅱ	(1.52)	焼成：良好、胎土：粗、長さ（28.1）、幅（16.9）、厚さ3.1

S-1404（ピット）　調査区の南東側にて検出した。平面形は南東側の一部のみの検出であるが、不整な楕円形と考えられる。規模は直径が0.5mを測る。当ピットは南側に近接するS-1403を切っている。

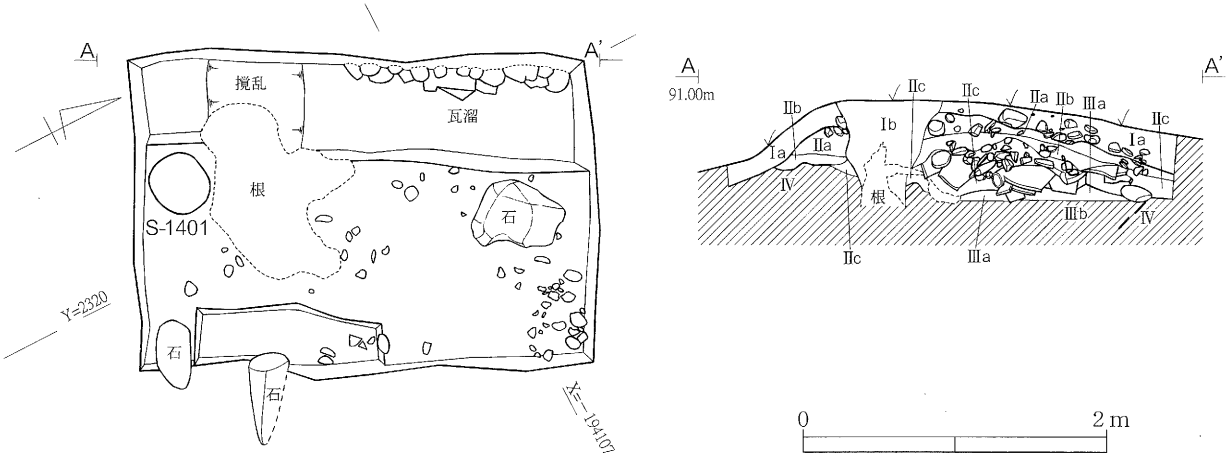
出土遺物　Ⅱ層：塀平瓦３点、駒付平瓦１点、三巴文軒丸瓦１点、三巴文軒桟瓦２点、桟瓦５点、熨斗瓦２点、冠伏間瓦３点　Ⅲ層：塀平瓦１点、駒巴瓦１点、桟瓦１点、平瓦１点、冠伏間瓦１点

２．２トレンチ

当調査区は、１トレンチと同様の北東側へ急激に下がる崖面と南側の市道に挟まれた狭い平坦部に、３m×２mのトレンチを設定した。東側には石垣及び石組側溝に使用されたと考えられる石材が散乱している。

(1) 層序

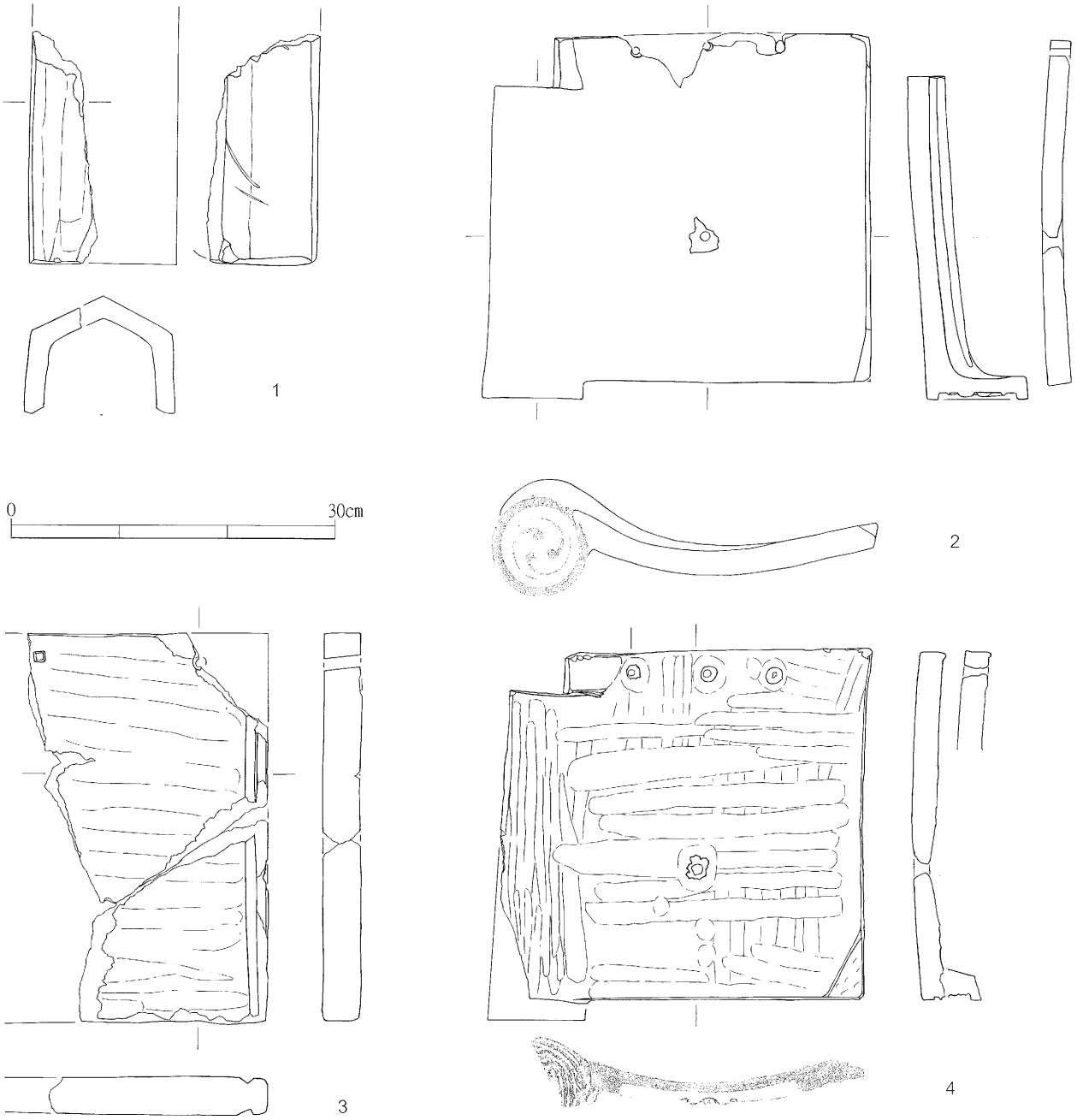
層序は大きく分けてⅠ層（表土・攪乱）、Ⅱ層（盛土）、Ⅲ層（整地層・遺構埋土）、Ⅳ層（地山）の４層を確認した。Ⅱ層は黄褐色細砂質シルト層を主体とし、Ⅰ層と共に多くの円礫（径10～15cm大）を含んでいる。最下層からは完形の桟瓦が重なった状態で出土した。Ⅲ層は硬くしまった黄褐色粘質土で、ほぼ水平の堆積が確認された。土



第11図　２トレンチ平面・断面図（1/50）

第３表　２トレンチ土層註記表

遺構	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
	Ⅰa	10YR3/1	黒褐色	表土(腐植土)	なし	なし	表土（腐植土）。
	Ⅰb	10YR2/2	黒褐色	細砂質シルト	なし	なし	攪乱、木根、礫（径1cm大）を多く含む。
	Ⅱa	10YR5/6	黄褐色	細砂質シルト	ややあり	なし	盛土、礫（径0.5cm大）を多く含む。
	Ⅱb	10YR5/4	にぶい黄褐色	細砂質粘土	あり	なし	盛土、礫（径0.5cm大）、白色粘土ブロックを多く含む。
	Ⅱc	10YR6/8	明黄褐色	細砂質粘土	あり	あり	遺物包含層、瓦（完形に近い）、礫（径10cm大）を多く含む。
	Ⅲa	10YR6/6	明黄褐色	粘質シルト	あり	あり	整地層①、瓦片、礫（径5cm大）、地山ブロック（2.5YR7/2・7.5YR7/8、白色・黄色・朱色粘土、径0.5cm）を含む。
	Ⅲb	10YR6/6	明黄褐色	粘質シルト	あり	あり	整地層②、瓦片(2cm大)少量と礫(径5cm大)、地山(2.5YR7/2・7.5YR7/8、白色・黄色・朱色粘土ブロック0.5cm)を多く含む。
	Ⅳ	2.5Y8/2	灰白色	シルト	あり	あり	地山、白色系シルト質で、硬く締まった岩盤。
S-1401		10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	あり	あり	地山の白色系シルト質（硬く締まった岩盤ブロック0.5cm大）を少量含む。



第12図　２トレンチ出土遺物実測図（1/6）

第４表　２トレンチ出土遺物註記表

図版番号	種類	遺物番号	遺構・層位	重さ（kg）	特徴（計測値の単位はcm）
第12図　1	冠伏間瓦	21	Ⅱ	(0.66)	焼成：良好、胎土：密、長さ（21.5）、幅（5.3）、高さ（9.7）
第12図　2	軒桟瓦	42	Ⅲ	(4.34)	三巴文、瓦当径9.3、中央長32.2、中央幅35.0、厚さ1.8～2.1
第12図　3	塼平瓦	182・183	Ⅱ・Ⅲ	(3.30)	焼成：良好、胎土：粗、長さ（36.0）、幅（21.2）、厚さ（3.5）
第12図　4	軒桟瓦	46	Ⅲ	(4.04)	焼成：良好、胎土：密、長さ34.7、幅32.3、厚さ2.3、瓦当：瓦当長さ（32.3）、瓦当高（2.2）

層内には地山の黄褐色土、岩盤等が径0.5cmの大きさで人為的に混和されていることから、基盤整備等の整地層と考えられる。また、Ⅲ層は下層の地山を南西から北東に低くなるように浅い段状に削り込み、水平に整地していた。Ⅳ層の地山は、調査区の東西端で確認されたシルト質の洪積層である。

(2) 遺構と遺物

S-1401（ピット） 調査区西側の整地層であるⅢa層上面にて検出した。平面形状は楕円形を呈する。ピット内については、柱痕を確認することはできなかった。規模は直径が0.4mを測る。

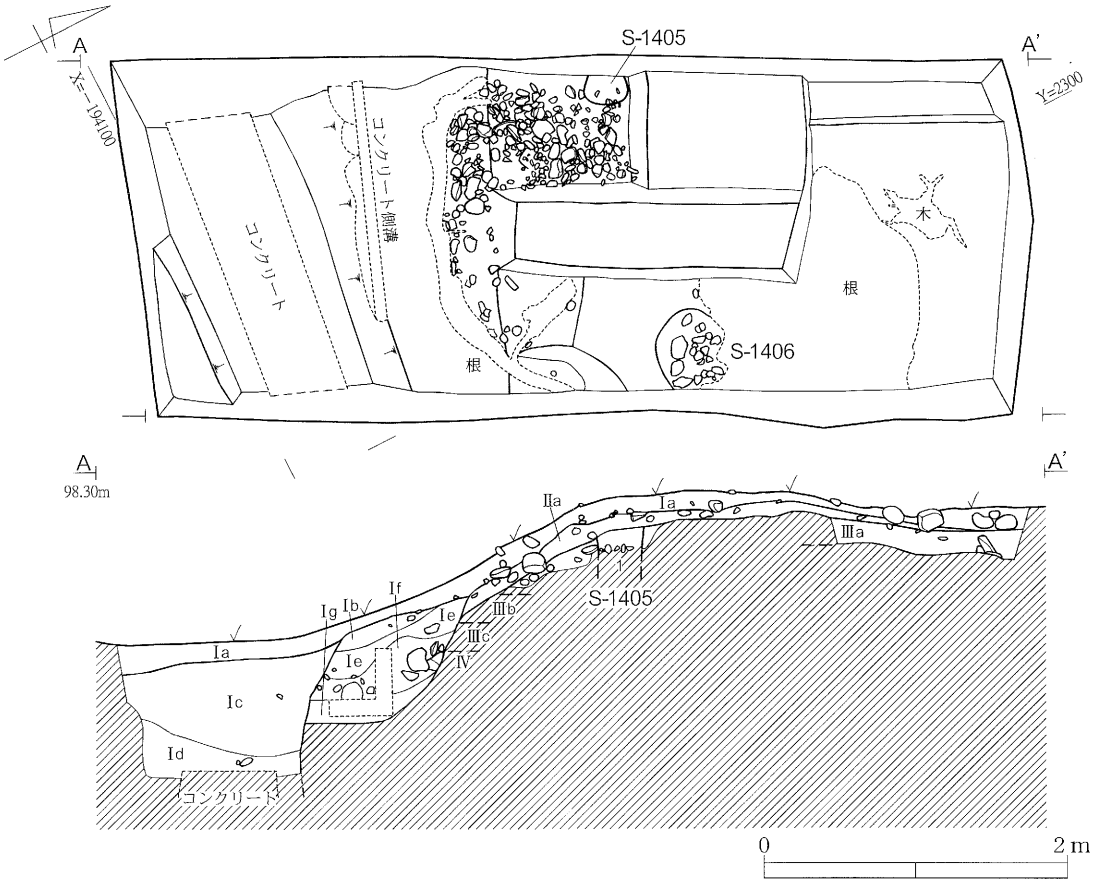
出土遺物 Ⅰ層：三巴文軒桟瓦１点、冠伏間瓦１点、駒付平瓦１点、駒巴瓦１点 Ⅱ層：三巴文軒桟瓦１点、平瓦１点、桟瓦２点、冠伏間瓦２点、道具瓦１点、駒付平瓦２点、塀平瓦１点 Ⅲ層：三巴文軒桟瓦２点、三引両文軒桟瓦１点、三巴文＋無文軒桟瓦１点、平瓦３点、桟瓦３点、熨斗瓦５点、道具瓦１点、駒巴瓦１点

３．３トレンチ

３トレンチ周辺は、沢門から本丸詰門下の時太鼓に至る登城路の中央にあたる。当調査区は市道青葉城線の道路際から土塁に直行する形で、南北６m、東西２mの大きさのトレンチを設定した。土塁は道路から幅３mの平坦地を隔てた北側に位置し、その背後は急激に下がる崖面を呈している。高さ１m、幅４mを測り、南西側の道路に平行した土塁状を呈しており、登城路に関わる可能性が高いことから、その性格を解明することを主たる目的とした。

(1) 層序

層序は大きく分けてⅠ層（表土・攪乱）、Ⅱ層（盛土）、Ⅲ層（整地層・遺構埋土）、Ⅳ層（地山）の４層を確認した。Ⅱ層は明黄褐色粘砂質シルト層を主体とし、Ⅰ層と共に多くの円礫を含んでいる。層下面からは比較的に良好な瓦が出土した。Ⅲ層はⅢa～Ⅲcの３層があり、いずれも硬くしまった黄褐色シルト質粘土で、ほぼ水平の堆積が確認できた。Ⅲa・Ⅲcの土層内には地山の黄褐色土、岩盤等が径１～３cm大のブロックとして混入しており、その



第13図 ３トレンチ平面・断面図（1/50）

第５表　３トレンチ土層注記表

遺構	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
	Ⅰa	10YR3/1	黒褐色	細砂質シルト	なし	なし	表土（腐植土）。
	Ⅰb	10YR8/6	黄橙色	粘砂質土	なし	なし	現代の埋設管掘り方埋土、地山黄褐色粘土ブロック（径0.5cm大）含む。
	Ⅰc	5GY7/1	明オリーブ灰色	細砂土	なし	なし	現代の埋設管埋土、（地山ブロック（5GY7/1黄褐色粘土、径0.5cm大）含む。
	Ⅰd	10YR2/1	黒色	細砂質シルト	ややあり	あり	現代の埋設管掘り方埋土、（地山黄褐色粘土ブロック径0.5cm大）含む。
	Ⅰe	10YR3/2	黒褐色	細砂質シルト	ややあり	あり	現代の埋設管掘り方埋土、礫（径3～5cm大）を多く含む。
	Ⅰf	10YR6/4	にぶい黄橙色	細砂質シルト	あり	あり	現代の埋設管掘り方埋土、地山粘土ブロック（径0.5cm大）を多く含む。
	Ⅰg	10YR6/8	明黄褐色	粘質土	あり	なし	現代の埋設管掘り方埋土、地山ブロック（径5～10cm大）を多く含む。
	Ⅱa	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂質シルト	なし	なし	盛土、表土下層、木の根、地山ブロック（黄褐色粘土）を多く含む。
	Ⅱb	10YR7/6	明黄褐色	粘砂質シルト	あり	なし	盛土、表土下層、地山ブロック（黄褐色粘土径3～8cm大）を多く含む。
	Ⅲa	10YR7/6	明黄褐色	粘質シルト	あり	あり	整地層①、地山ブロック（白色・黄褐色粘土径1～3cm大）を少量含む。
	Ⅲb	10YR4/6	褐色	細砂質粘土	あり	あり	整地層②、礫（径5～15cm大）を多数含む。
	Ⅲc	10YR5/8	黄褐色	細砂質粘土	あり	あり	整地層③、地山ブロック（白色・黄褐色粘土径0.5cm大）を多く含む。
	Ⅳ	7.5YR8/3	浅黄橙色	シルト質粘土	あり	あり	地山岩盤の二次堆積、混ざりのないシルトの水平縞状（厚さ約0.5cm）堆積。
S-1406	l	10YR4/6	褐色	細砂質シルト	あり	なし	ピット埋土には、礫（径3～10cm大）多数と、瓦小片を数点含む。
S-1407		10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂質シルト	あり	なし	ピット埋土には、瓦数点と礫（径3～10cm大）を多く含む。

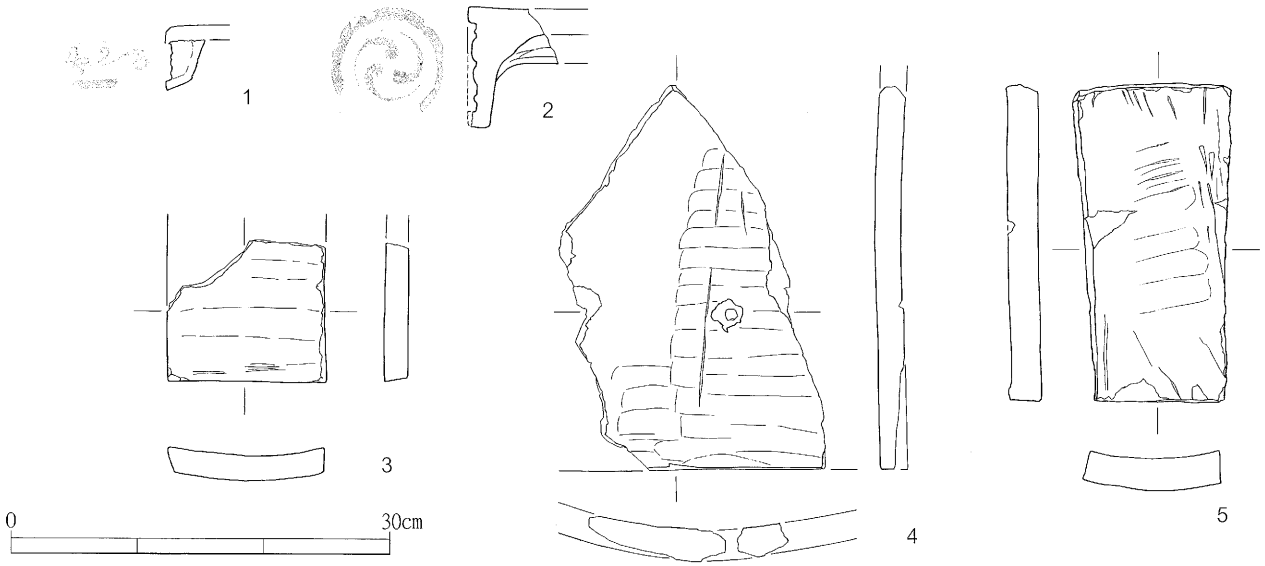
間の層であるⅢb層には径５～15cm 大の円礫が多数混ざっていた。いずれも基盤整備等のために構築された整地層と考えられる。Ⅳ層の地山は北側と南側に確認できた。

(2) 遺構と遺物

S-1405（ピット）　調査区中央の西辺において東側の一部を検出した。ピットは整地層であるⅢa層上面より切り込まれている。西側半分が調査地外であるため全形は不明であるが、楕円形を呈するものと考えられる。直径が0.3mを測り、少量の円礫（径５cm 大）を含んでいた。

S-1406（ピット）　調査区中央の東側にて円形のピットを検出した。整地層であるⅢa層上面より切り込まれている。直径0.5mを測り、多数の円礫（径10cm 大）と数点の瓦片を含んでいた。

出土遺物　Ⅰ層：桔梗文軒平瓦１点、軒平瓦１点、三巴文軒桟瓦２点、桟瓦１点、熨斗瓦２点　Ⅱ層：軒丸瓦１点、平瓦２点、桟瓦１点、熨斗瓦１点、道具瓦１点、駒付平瓦１点



第14図　３トレンチ出土遺物実測図（1/6）

第６表　３トレンチ出土遺物註記表

図版番号	種類	遺物番号	遺構・層位	重さ（kg）	特徴（計測値の単位はcm）
第14図　1	軒平瓦	67	Ⅰ	(0.08)	桔梗文、焼成：良好、胎土：軟、長さ（3.0）、高さ（4.1）、厚さ1.9
第14図　2	軒桟瓦	66	Ⅰ	(0.36)	三巴文、焼成：良好、胎土：密、長さ（6.9）、厚さ（1.4）、瓦当径（9.3）
第14図　3	熨斗瓦	31	Ⅰ	(0.38)	焼成：良好、胎土：密、長さ（11.2）、幅12.5、厚み2.0
第14図　4	平瓦	130	Ⅱ	(1.40)	線刻、焼成：良好、胎土：密、長さ（30.8）、幅（21.1）、厚さ2.6
第14図　5	熨斗瓦	61・70	Ⅰ・Ⅱ	(1.10)	焼成：良好、胎土：密、長さ25、幅12.2、厚さ2.5

4．4トレンチ

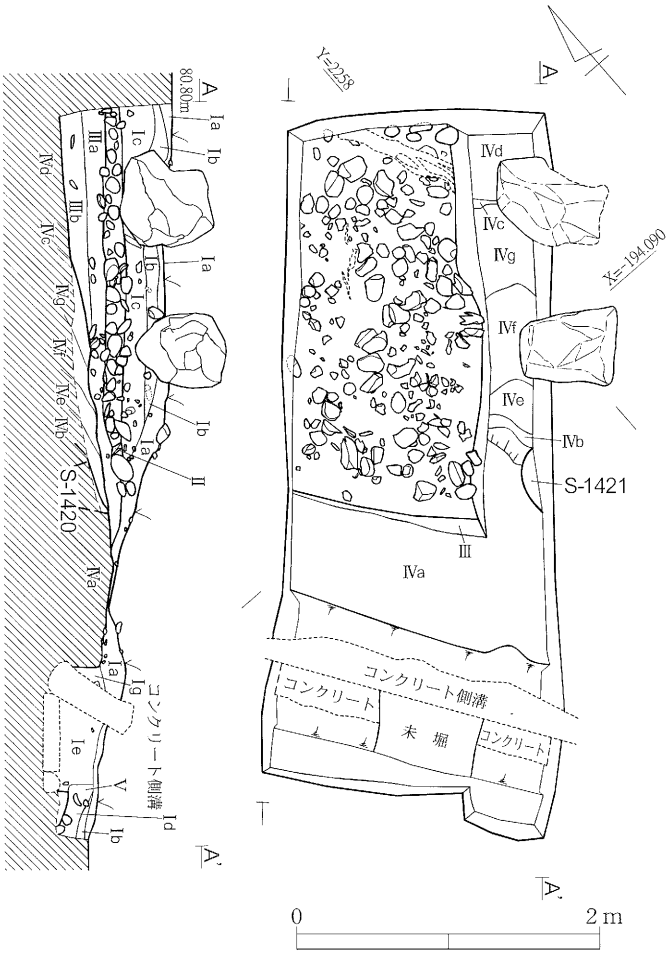
4～7トレンチは、本丸跡から降る現道路が、西向きから北へ曲がって中門跡へまっすぐ向かう右（東）側に設けた。いずれも沢門跡の南上方にあたり、そのうち4トレンチは最も上（南）で、道路がカーブするあたりである。この付近は、道路に沿った東側の幅2～3mが路面より低く、さらに東側は高さ1～1.5mの土塁が南北方向に伸び、道路から6～10m先で谷側への急斜面となっている。土塁の上面に、長径60～80cmの安山岩系の石材が2石露出しており、この石材と土塁の性格確認を主たる目的として調査区を設定した。調査範囲は、北東～南西方向に長さ4.6m、幅1.8mのトレンチとした。

(1) 層序

Ⅰ層はⅠa～Ⅰeに区分したが、いずれも新旧の表土および近代盛土・コンクリート側溝埋土等である。

Ⅱ層は土塁を主に構成している土層で、径5～20cm程度の円礫を大量に含む礫層である。主たる部分の厚さは約15cmで、下面はほぼ水平となっている。時期は瓦片以外に遺物の出土がないものの、桟瓦片が出土していることから近世後半期とみられる。同様の礫層は、第3～6トレンチでも検出し、その間の調査区外や周辺にも多量の礫が地表に露出している。Ⅲ層は、上下に分けたⅢa層がⅡ層の下でやはり水平な広がりをみせ、Ⅲb層は下層のⅣ層上面が北東側へ降るのを埋めるように北東へ厚く堆積している。

Ⅳ層のうちⅣa層は、一見地山と見間違うような黄褐色の混じりのない粘質土層で、トレンチ南西端に一部のみみられる地山（Ⅴ層）と直接接する。このⅣa層上面は後に述べるピット（S-1420）の付近で急激に北東側へ下降し、その斜面を埋めるようにⅣb・Ⅳe・Ⅳf・Ⅳg・Ⅳc・Ⅳd層が順次積み重なっている。Ⅳa層を除く各層は、地山土を始めとする複数種の土が混合したもので、明らかに斜面を埋めた盛土（造成土）と思われる。



第15図　4トレンチ平面・断面図（1/50）

第7表　4・5トレンチ土層註記表

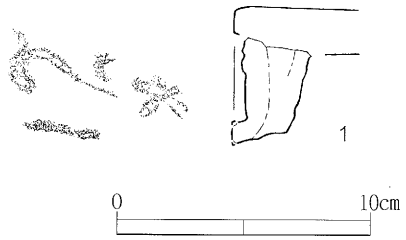
遺構	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
	Ⅰa	10YR6/2	灰黄褐色	シルト	なし	なし	現表土。
	Ⅰb	10YR7/8	黄橙色	シルト	あり	強い	地山起源の近代盛土。黄橙色・灰白色のシルト質土と褐色砂の混合。
	Ⅰc	10YR5/2	灰黄褐色	砂質	なし	弱い	Ⅰb盛土以前の旧表土。
	Ⅰd	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂質	なし	あり	近代の攪乱坑埋土
	Ⅰe	10YR4/1	褐灰色	砂質	なし	弱い	コンクリート側溝内堆積土。
	Ⅰf	10YR6/2	灰黄褐色	砂質	なし	なし	コンクリート側溝内堆積土下層。
	Ⅰg	10YR6/4	にぶい黄橙色	細砂質	あり	弱い	コンクリート側溝掘り方埋土。
	Ⅱ	7.5YR5/8	明褐色	砂質	あり	弱い	拳大前後の礫を多量に含む。いわゆる礫層。
	Ⅲa	10YR4/6	褐色	砂質	あり	弱い	粒径1cm以下の白色・灰色・褐色地山起源土を多量に含む。
	Ⅲb	10YR4/6	褐色	砂質	あり	弱い	Ⅲa類似。地山起源土の粒径小さく、量も少ない。Ⅲaよりやや淡い色調。
	Ⅳa	10YR7/8	黄橙色	砂質シルト	強い	強い	明黄橙色。白色・灰色・褐色の地山起源土を多く含む。きわめてしまり強い。
	Ⅳb	10YR5/6	黄褐色	粘質	あり	弱い	暗黄褐色。砂粒・小礫をほとんど含まない。
	Ⅳc	7.5YR8/2	灰白色	粗砂質	なし	あり	粒径3cm以下の粗砂質土。
	Ⅳd	7.5YR7/8	黄橙色	粘質	あり	強い	灰白色土と灰黄色がブロック状に混合。
	Ⅳe	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂質	あり	あり	小礫混じり。径0.5cm程度の地山起源粒含む。
	Ⅳf	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質	あり	弱い	細砂質土。均質で混じり少ない。
	Ⅳg	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂質	あり	あり	Ⅳe類似。灰色粒少ない。
	Ⅴ	10YR8/1	灰白色	シルト	あり	強い	地山。鉄分の染み込みで部分的に黄褐色。径0.1cm以下の白色粒含む。
S-1418		10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質	あり	弱い	5トレンチ中央、サブトレンチ内Ⅳa層上面にて検出、礫を少量含む。
S-1419		10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質	あり	弱い	5トレンチ中央、サブトレンチ内Ⅳa層上面にて検出、礫を少量含む。
S-1420		10YR5/6	黄褐色	粘質	あり	弱い	4トレンチ南東壁Ⅳc上面にて検出、暗黄褐色。砂粒・小礫をほとんど含まない。

(2) 遺構と遺物

調査区設定の理由のひとつであった２個の石材は、Ⅰ層（表土・近代盛土）の上に載っており、石組側溝等の遺構としての性格をもたないことが判明した。

S-1420（ピット） Ⅳa層上面が北東へ下降する肩部にあたるところ、調査区南東壁面に一部かかるかたちでピットを検出した。径45㎝を測り、埋土は上層のⅣb層とほぼ同じである。

出土遺物 Ⅰ～Ⅲ層で瓦片少量（33点）を検出した。



第16図 ４トレンチ出土遺物実測図（1/3）

第８表 ４トレンチ出土遺物註記表

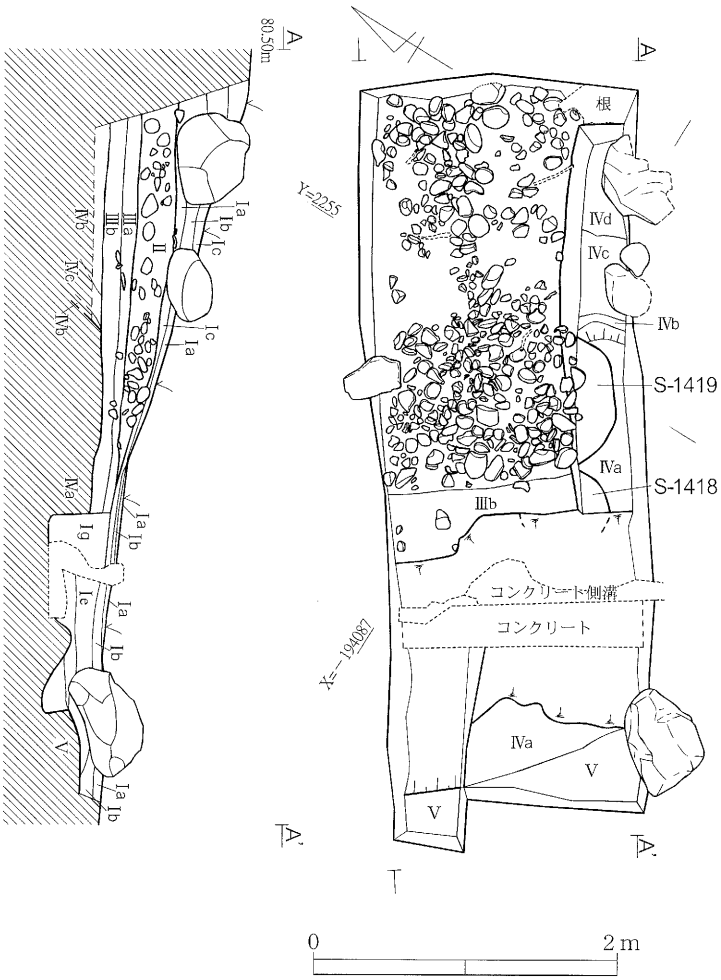
図版番号	種 類	遺物番号	遺構・層位	重さ（kg）	特徴（計測値の単位はcm）
第16図 1	軒平瓦	93	Ⅰ	(0.12)	桔梗文、焼成：良好、胎土：軟、長さ（2.3）、瓦当高（4.2）、瓦当厚2.2

５．５トレンチ

４トレンチの北側、約２m離れてほぼ平行に５トレンチを設定した。発掘前の状況は４トレンチとほぼ同じで、道路の北東側に路面より低い平坦部が幅３mほどあり、そこから先は高さ約１mの土塁を形成し、道路から８～９mで谷側への急斜面となる。道路沿いの平坦部に長径70㎝程の石材１石、土塁の斜面部分にそれぞれ長径40㎝・60㎝程度の石材２石が露出しており、これら石材および土塁の性格確認を目的として５トレンチを設定した。

(1) 層序

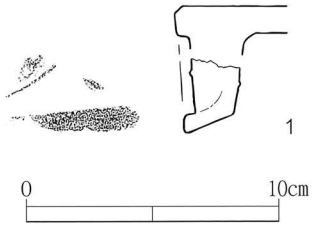
土層は、近接している関係もあって４トレンチ・５トレンチで類似する部分が多く、土層名（番号）も共通のものを付した。Ⅰ層は新旧の表土・近代の盛土、およびコンクリート側溝周辺の撹乱土層である。調査区北東端の土塁の上部では、盛土を含めて厚さ50㎝に達する。Ⅱ層は土塁を主に形づくっている礫層である。最大の厚さ30㎝程もあるが、南西側（道路側）にむかって急激に薄くなり、直接現表土に接してコンクリート側溝手前で消滅する。Ⅲa・Ⅲb層はⅡ層の下全体に広がり厚さ20㎝程度を測る。Ⅱ・Ⅲ層とも近代遺物を含まず、瓦片少量が出土したのみであるが、Ⅱ層には桟瓦らしき小片が認められた。Ⅳa層は、Ⅲb層の下、コンクリート側溝の周辺に大きく広がり、調査区北東端から1.7m付近で北東側へ落ち込む。そこからさらに北東側には、Ⅳb・Ⅳc・Ⅳd層が斜面を埋めるように堆積し、Ⅳa層を含めたその上面は一体の水平面を形成する。切土・盛土を伴う整地面であろう。Ⅴ層は明瞭な洪積世堆積層（地山）である。



第17図 ５トレンチ遺構平面・断面図（1/50）

(2) 遺構と遺物

地表に露出していた３個の石材はⅠ層（表土・近代盛土）の上に載っており、遺構としての原位置を保っていないことが判明した。



第18図　５トレンチ出土遺物実測図（1/3）

S-1418（ピット）　前記S-1419と同一面ですぐ南西側に検出した。これも略円形を呈するものと思われるが、南西側半分程はコンクリート側溝の掘り方で壊され、残りの大半も北西側のサブトレンチ外となる。側溝掘り方の壁面に遺構断面がかかっており、そこで観察すると径60cm、深さ30cm程度を測る。

S-1419（ピット）　南東壁サブトレンチ内のⅣa層上面に、一部北東側への落ち込みにかかって検出した。半分以上が北西側のサブトレンチ外であるが、円形ないし楕円形と見られる。検出長85cm、検出幅25cmを測る。

出土遺物　Ⅰ～Ⅲ層で瓦片33点検出。

第９表　５トレンチ出土遺物註記表

図版番号	種　類	遺物番号	遺構・層位	重さ（kg）	特徴（計測値の単位はcm）
第18図　1	軒平瓦	103	Ⅱ	(0.04)	焼成：良好、胎土：軟、瓦当高（3.1）、瓦当厚2.0

６．６トレンチ

道路際から土塁に直行する状態で東西６ｍ、南北２ｍのトレンチを設定した。道路側斜面に長径45cmの安山岩系の石材が露出している。土塁は道路に近接した状態で大きく隆起し、背後の東側は谷に向かって急に傾斜する。高さ1.6m、幅７ｍを測り、この付近では直線状に道路に平行する。これらの石材や土塁の性格解明を主目的に調査を行った。

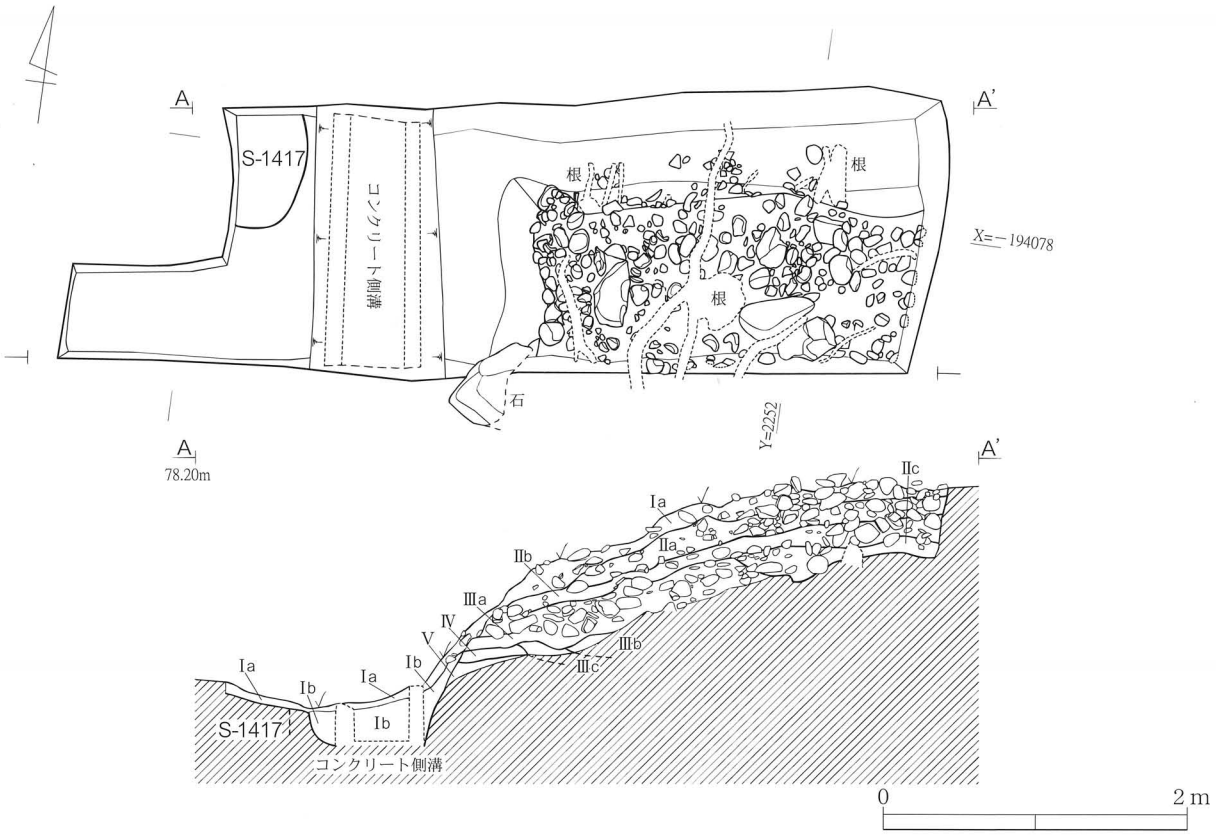
(1) 層序

層序はⅠ層（表土・攪乱）、Ⅱ層（盛土）、Ⅲ層（整地層）、Ⅳ層（旧表土）、Ⅴ層（地山）の５層がある。Ⅰ層には径15cm大の円礫を非常に多く含む。土塁の傾斜面に露出した石材は、Ⅰ層の表土中に含まれていることから、近現代に移動したものと判断できる。Ⅱ層はa～cの３層があり、明黄褐色シルト質粘土層が主体的である。Ⅰ層と同様に多くの円礫と少量の瓦を含んでいる。最下層面からは安定した状態で残存状況が良好な数枚の瓦が出土した。Ⅲ層は黄褐色シルト層を主体とし、Ⅲa～Ⅲcの３層がある。何れもしまった土質を呈し、Ⅲb・Ⅲcの土層内には地山の黄褐色土等が径１～５cm大のブロックとして混ざっていることから、いずれも基盤整地等のための整地層と考えられる。Ⅳ層は地山直上に堆積している旧表土である。このⅣ層は、西側斜面地の一部を切り込み、段を有しており、この段の上面からⅢa～Ⅲcの整地が行われている。Ⅳ層は堆積の前後関係からみると、Ⅲ層の基盤整地以前にまで遡ることが推測できる。Ⅴ層は黄褐色シルトの地山である。

(2) 遺構と遺物

S-1417（土坑）　調査区西端にて土坑の一部を検出した。地山であるⅤ層上面より切り込まれている。平面形状は西・北側が調査地外であるため全形は不明であるが、楕円形を呈するものと考えられる。規模は検出長0.75m、検出幅0.45mを測る。埋土は地山の黄橙色粘質シルトのブロックを少量含む黄褐色シルトである。

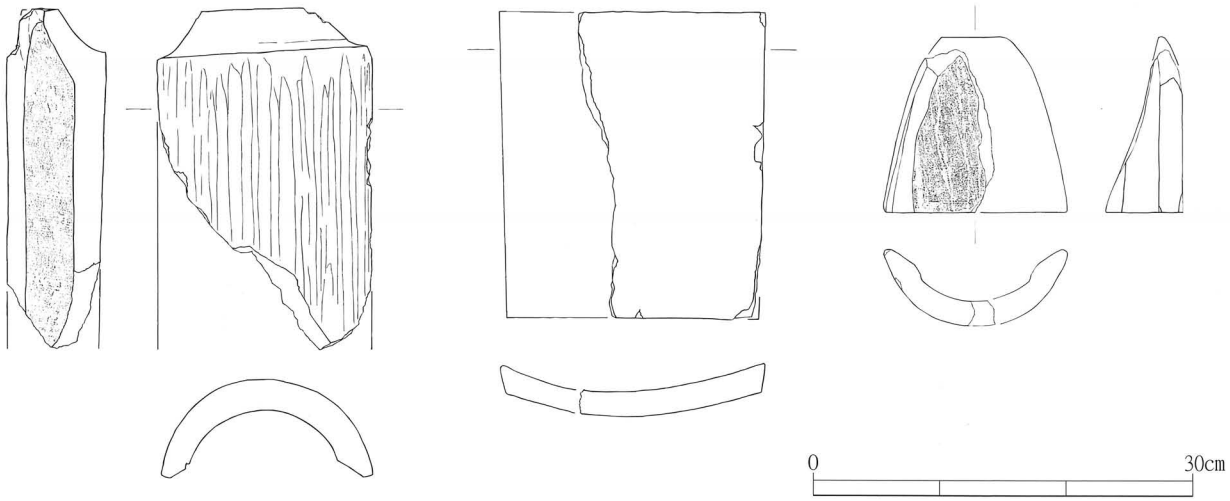
出土遺物　Ⅰ層：丸瓦１点、輪違１点、塀平瓦１点　Ⅱ層：平瓦２点、駒巴瓦１点　Ⅲ層：平瓦２点、垂文軒桟瓦１点、桟瓦１点



第19図　6トレンチ遺構平面・断面図（1/50）

第10表　6トレンチ土層註記表

遺構	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
	Ⅰa	10YR3/2	黒褐色	細砂質シルト	なし	なし	表土、礫（径10～15cm大）を多く含む。
	Ⅰb	10YR2/2	黒褐色	細砂質シルト	あり	なし	コンクリート側溝埋土、礫・細砂を多く含む。
	Ⅱa	10YR5/6	黄褐色	シルト	なし	なし	盛土、礫（径10～15cm大）を含む。
	Ⅱb	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	あり	なし	盛土、礫（径5～15cm大）を多く含む。
	Ⅱc	10YR6/6	明黄褐色	シルト質粘土	あり	ややあり	遺物包含層、礫（径5～15cm大）、残存状態が良好な瓦を含む。
	Ⅲa	10YR5/4	にぶい黄褐色	細砂質シルト	あり	ややあり	整地層、混ざりなし。
	Ⅲb	10YR8/4	浅黄橙色	粘質シルト	あり	あり	整地層、地山岩盤ブロック（径1～3cm大）を多く含む。
	Ⅲc	10YR5/6	黄褐色	シルト	あり	あり	整地層、礫（径3～5cm大）、地山ブロックを多く含む。
	Ⅳ	10YR4/2	灰黄褐色	細砂質シルト	ややあり	なし	旧表土。地山直上の自然堆積、整地を行う以前の表土面。
	Ⅴ	10YR7/8	黄橙色	粘質シルト	あり	あり	地山、軟質土層。
S-1417		10YR5/8	黄褐色	粘質シルト	あり	あり	礫（径1cm大）少量と地山ブロック（黄橙色粘質シルト）を少量含む。



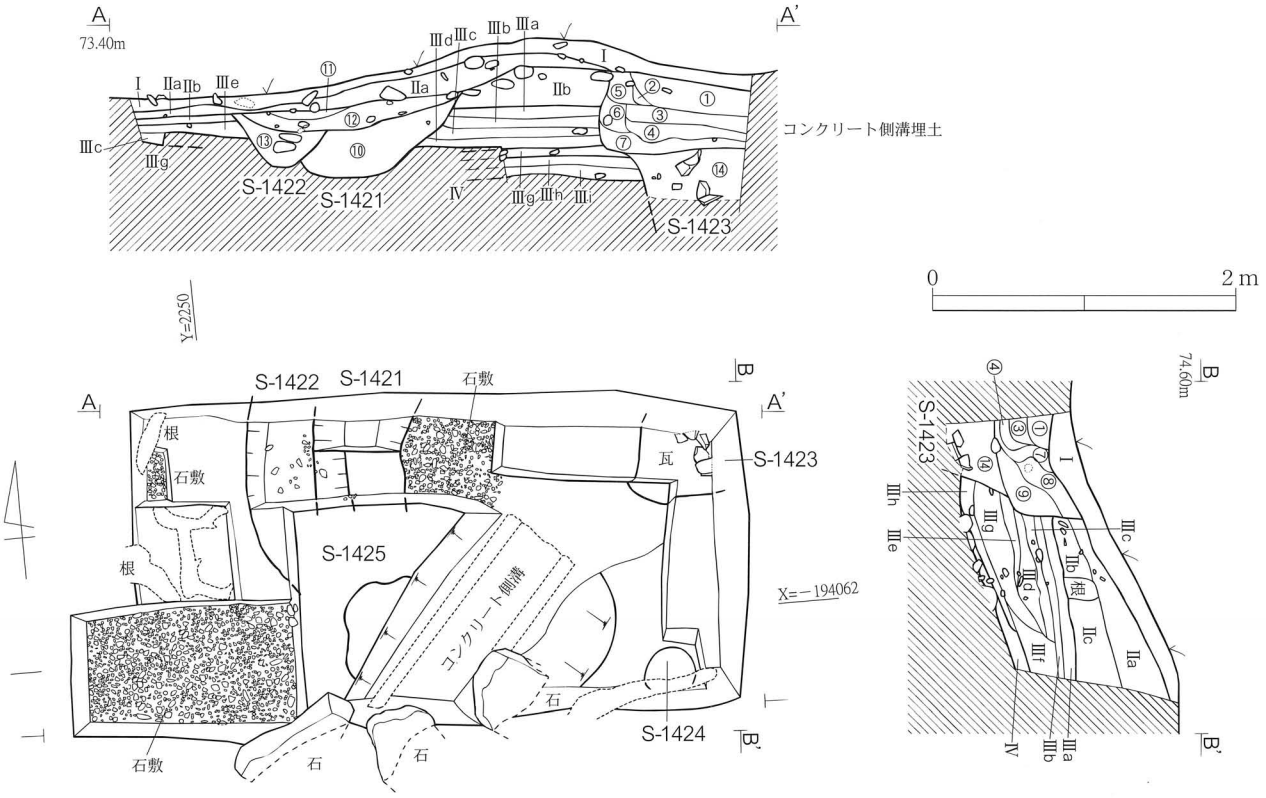
第20図　6トレンチ出土遺物実測図（1/6）

第11表　6トレンチ出土遺物註記表

図版番号	種類	遺物番号	遺構・層位	重さ（kg）	特徴（計測値の単位はcm）
第20図　1	丸瓦	156	Ⅰ（コンクリート側溝内）	(1.62)	焼成：良好、長さ（27.4）、幅17.1、高さ7.9
第20図　2	平瓦	107	Ⅲ	(1.06)	焼成：良好、長さ24.1、幅（14.5）、厚さ平均2
第20図　3	輪違い瓦	97	Ⅰ	(0.28)	長さ（13）（推定長さ14程度）、幅（8.9）、推定幅（14.6程度）、平均厚さ1.9

7．7トレンチ

当調査区は、市道青葉城線の道路際から土塁の北端に直行する状態で、東西4.5m、南北2.2mのトレンチを設定した。土塁の傾斜面に3石の石材が露出している。西側は長辺1m、中央と東側は一辺0.5mを測る安山岩系の石材である。西側の1石は長さ1m、幅0.25mの長角石に粗加工が施されている。土塁は道路に平行して南北方向に走行しており、背後の東側は谷状に大きく傾斜し、高さ0.7m、幅6mを測る。これらの石材や土塁の性格解明を目的に調査を行った。



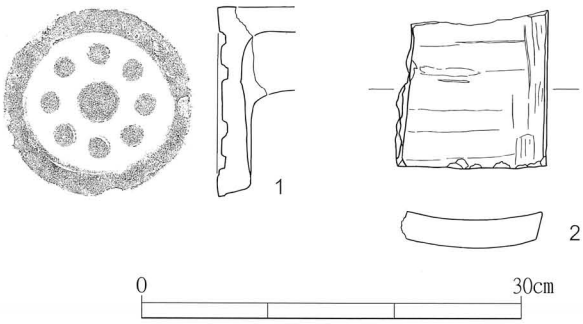
第21図　7トレンチ平面・断面図（1/50）

第12表　7トレンチ土層註記表

遺構	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
	Ⅰ	10YR1/2	黒色	細砂質シルト	なし	なし	表土。
	Ⅱa	10YR4/4	褐色	細砂質粘土	なし	なし	盛土、円礫（径1～2cm大）を少量含む。
	Ⅱb	10YR3/2	黒褐色	細砂質シルト	なし	なし	盛土、純粋なシルト層で混ざりなし。
	Ⅱc	10YR6/8	明黄褐色	細砂質シルト	なし	なし	盛土、無し細砂質シルト層。
	Ⅲa	10YR7/6	明黄褐色	細砂質シルト	ややあり	ややあり	整地層、混ざりのない白色・黄色細砂シルト層が縞状に水平堆積。
	Ⅲb	10YR6/6	明黄褐色	細砂質シルト	あり	ややあり	整地層、岩盤状の地山ブロック（径1～5cm大）を多く含む。
	Ⅲc	10YR4/4	褐色	シルト	ややあり	あり	整地層、シルト層に地山ブロックがわずかに混ざる。
	Ⅲd	10YR5/4	にぶい黄褐色	細砂	なし	あり	整地層、地山ブロック（径1～5cm大）を多く含む。
	Ⅲe	10YR7/3	にぶい黄橙色	細砂	なし	あり	整地層、混ざりのない細かい砂層。
	Ⅲf	10YR7/8	黄橙色	シルト	ややあり	ややあり	自然堆積、地山の二次堆積。
	Ⅲg	10YR4/4	褐色	粘質シルト	あり	あり	礫敷き遺構、円礫（径1～1.5cm大）を多数敷き詰めている。
	Ⅲh	10YR6/6	明黄褐色	粘質シルト	あり	あり	整地層、地山の礫（径3～5cm大）を少量含む。
	Ⅲi	10YR6/6	明黄褐色	粘質土	あり	あり	整地層、地山ブロックを含む。
	Ⅳ	10YR7/8	黄橙色	砂礫粘土	あり	あり	地山、礫層群（円礫径5～10cm大）を多く含む。
	1	10YR3/1	黒褐色	細砂質シルト	なし	なし	コンクリート側溝北側延長部の上層埋土。表土と同様の腐植土。
	2	10YR5/4	にぶい黄褐色	細砂質シルト	なし	なし	コンクリート側溝北側延長部の上層埋土。表土と同様の腐植土に④層がブロックにて混じる。
	3	10YR4/4	褐色	細砂質シルト	ややあり	ややあり	コンクリート側溝北側延長部の埋土。表土と同様の腐植土に④層がブロックにて混じる。
	4	10YR3/1	黒褐色	細砂質粘土	ややあり	ややあり	コンクリート側溝北側延長部の埋土。⑤層と同様のブロックが混じる。
	5	10YR2/1	黒色	細砂質シルト	あり	なし	コンクリート側溝北側延長部の埋土。表土と同様の腐植土。
	6	10YR4/4	褐色	シルト	あり	あり	コンクリート側溝北側延長部の下層埋土。表土と同様の腐植土。
	7	10YR5/6	黄褐色	粘質土	あり	あり	コンクリート側溝北側延長部の下層埋土。表土と同様の腐植土。
	8	10YR3/2	黄褐色	シルト	あり	ややあり	コンクリート側溝北側延長部埋土、細砂、表土の腐植土を含む、側溝の埋土。
	9	10YR5/6	黄褐色	シルト	あり	ややあり	コンクリート側溝北側延長部埋土、地山の黄褐色粘土ブロック、礫（円礫径5cm大）を含む。
S-1421	10	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	あり	ややあり	溝埋土（10YR5/4にぶい黄褐色粘土）ブロックを含む。
S-1422	11	10YR5/6	黄褐色	シルト	あり	なし	溝埋土上層、礫（径5cm大）を数個含む。
	12	10YR4/4	褐色	細砂質粘土	あり	あり	溝埋土中層、（10YR5/4にぶい黄褐色粘土）ブロックを含む。
	13	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘質シルト	あり	あり	溝埋土下層、（10YR7/8黄橙色シルト）ブロックを含む。
S-1423	14	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂質粘土	あり	あり	下層にはピットに対し縦方向の状況にて瓦が多く出土した。礫（径0.5cm大）を多く含む。
S-1424		10YR5/6	黄褐色	シルト	あり	あり	ピット埋土は、地山ブロック、円礫（径5cm）、瓦小片を少量含む。
S-1425		10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	あり	あり	ピット埋土には地山ブロック（径1cm大）、礫（径0.5cm大）を少量含む。

(1) 層序

層序は上位からⅠ層（表土･攪乱）、Ⅱ層（盛土）、Ⅲ層（整地層）、Ⅳ層（地山）の４層がある。Ⅰ層は表土と攪乱（近現代の側溝）がある。表土は腐植質の黒色細砂質シルト、側溝埋土は黒褐色細砂質シルトを主体としている。石材はⅠ層の表土中に含まれていることから、近現代に移設されたものであろう。Ⅱ層はa～cの３層があり、明黄褐色細砂質シルトが主体的である。比較的に軟質の盛土とみられるが、近現代の遺物は含んでいなかった。Ⅲ層はⅢa～Ⅲiの９層があり、明黄褐色細砂質シルトを主体とする整地層である。Ⅲa～Ⅲd・Ⅲh・Ⅲiについては地山の黄褐色土、岩盤等を径１～５cm大のブロックとして混入しているが、Ⅲeについては純粋な細砂層である。また、Ⅲgについては細砂質シルトに径１～1.5cm大の円礫を多く含んだ砂利層である。当Ⅲgは上下の整地層に挟まれている関係から同一の性格を有するものとも考えられるが、調査区の西側に於いてはⅢfより上層を確認することができなかったことから、整地層以外の礫敷き等の性格を有するものであろう。Ⅳ層は多くの礫を含んだ地山の礫層である。



第22図　７トレンチ出土遺物実測図（1/6）

第13表　７トレンチ出土遺物註記表

図版番号	種　類	遺物番号	遺構・層位	重さ（kg）	特徴（計測値の単位はcm）
第22図　1	軒丸瓦	121	Ⅱ	(0.58)	九曜文、焼成：良好、胎土：軟、瓦当径15、長さ（39）、厚さ2.5
第22図　2	熨斗瓦	161	Ⅱ	(0.44)	焼成：良好、胎土：密、長さ（12.2）、幅（11.8）、厚さ（2.3）

(2) 遺構と遺物

S-1423（ピット）　調査区北東角にて南西側の一部を検出した。ピットの切り込み土層は、コンクリート側溝に切られているため正確な位置を確認することはできなかったが、層位の高さからみるとⅢg層より上位と考えられる。北側半分が調査地外であるため全形は不明であるが、不定形を呈するものと考えられる。断面形状は逆台形を呈する。規模は検出部分から径0.33m以上、深さ0.35m以上を測る。埋土には多くの瓦片を含んでいた。

S-1424（ピット）　調査区南東部、土塁北端斜面にあたる部分で検出した。盛土であるⅡa層上面より切り込まれている。規模は直径が0.5mを測り、少量の円礫（径５cm大）と数点の瓦片を含んでいた。

S-1425（ピット）　調査区中央の東側にて円形状のピットを検出した。平面形状は部分確認であるため不明である。断面は盛土であるⅡb層より切り込まれた逆台形を呈する。規模は検出径が0.5mを測る。埋土は地山のブロック（径１cm大）を少量含む、にぶい黄褐色粘質シルトである。

S-1421（溝）　調査区中央の北辺において一部を検出した。Ⅱb層上面より切り込まれて、南北方向に走るものと考えられるが、検出長がわずか0.5mであるため全容は不明である。検出幅は0.4mを測る。断面形状は幅広い「U」字状を呈する。埋土内には少量の円礫（径５cm大）を含んでいた。

S-1422（溝）　調査区中央の北辺において一部を検出した。溝はⅡb層上面より切り込まれており、東側に隣接する溝S-1421を切っている。南北方向に走り、南側で東側へ大きく円弧を描いているが、その東側は未調査であるため全容は不明である。規模は検出長が1.2m、幅1.1mを測る。断面形状は「U」字状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトである。埋土内には少量の円礫（径５cm大）を含んでいた。

出土遺物　Ⅱ層：九曜文軒丸瓦１点、桟瓦１点、熨斗瓦１点、駒付平瓦１点

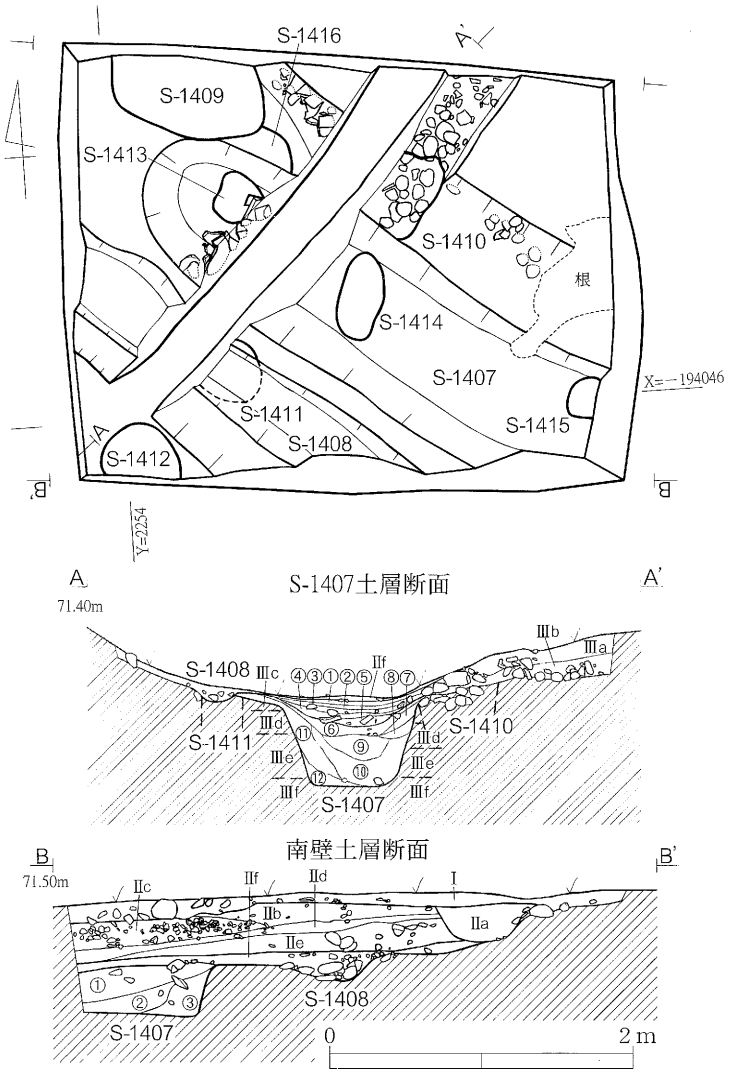
８．８トレンチ

８トレンチの調査地は、大手門より本丸への登城路と清水門や沢の曲輪からの登城路とが、「T」字状に合流する沢門の推定地である。さらに西側は中の曲輪の推定地でもあることから、登城路の中でも重要な地点と考えられる。

今回の調査は、沢門跡の検出と当門に伴う土塀跡等の確認を主目的とした。調査区は、市道青葉城線の東側に位置する平場に東西3.5m、南北3.0mのトレンチを設定した。地形的には、青葉山丘陵の北側へ下がる傾斜地に位置し、北東側は清水門からの登城路に伴う石垣とによって落差約９mを測る。

(1) 層序

層序はⅠ層(表土・攪乱)、Ⅱ層(盛土)、Ⅲ層(整地層)の３層がある。Ⅰ層の表土は腐植した黒色細砂質シルトを主体としている。攪乱は南西壁面にみられる表土から切り込んだ土坑である。この土坑内には多量の炭、焼土を含んでいる。Ⅱ層はa～fの６層があり、明黄褐色粘土が主体である。土層の性格としては、比較的に軟質であるが、数多くの水平堆積の状況から、近現代の盛土と考えられる。この盛土を行っている窪地は、北西から南東方向に走る幅2.5m、検出長4.3mの溝状のものである。性格としては、幅広く浅い形状や床面に砂利を多く混ぜ、硬く叩き締められていることから、路面として使用されていた可能性が高い。時期は、上面から昭和28年の十円硬貨が出土し



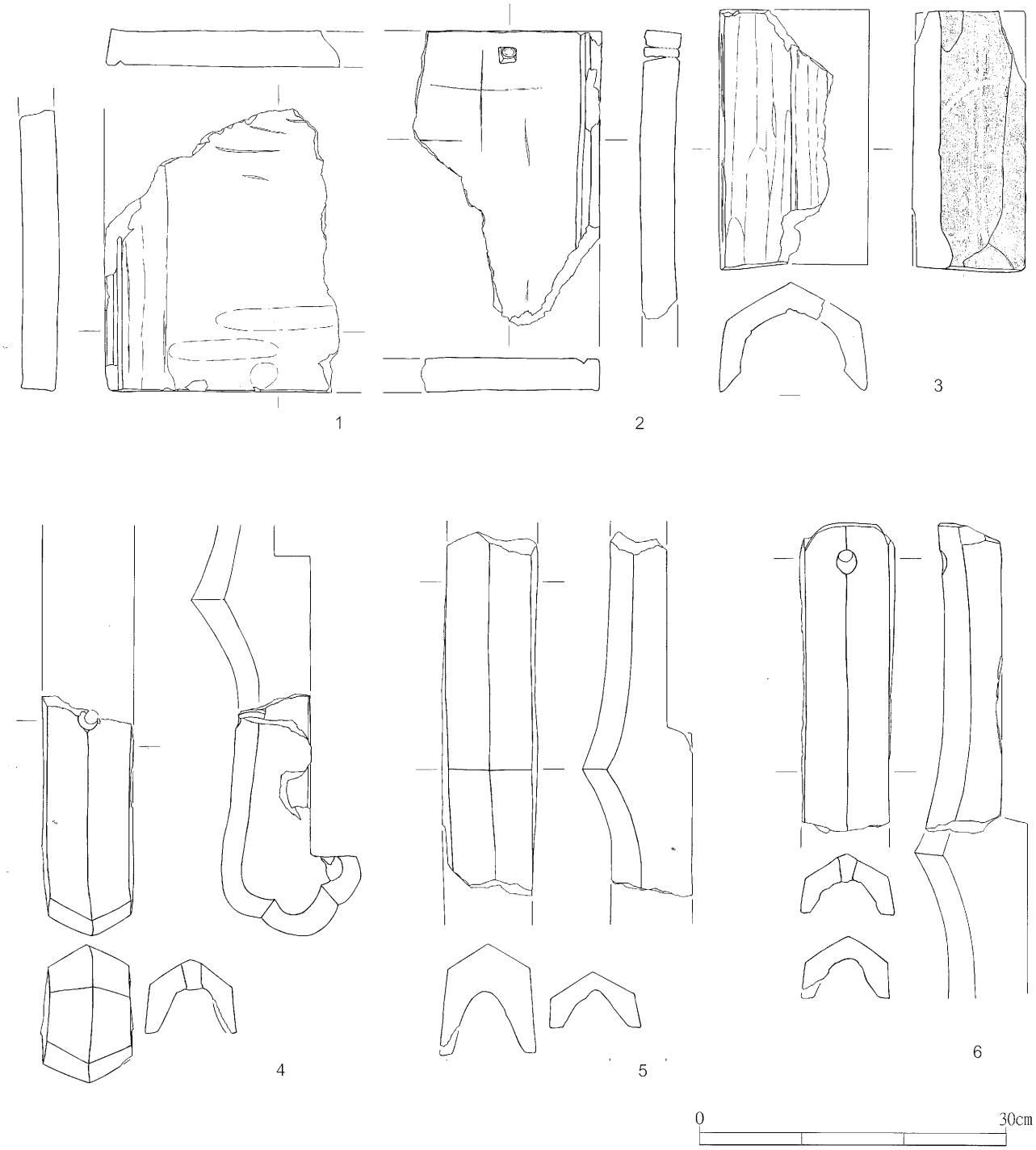
第23図　８トレンチ平面・断面図（１/50）

第14表　８トレンチセクションベルト・S-1407土層註記表

遺構	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
	Ⅱf	10YR2/1	黒色	細砂質シルト	なし	あり	旧表土、砂礫（径1cm大）を多く含み硬く締まっている。
	Ⅲa	10YR6/4	にぶい黄橙色	細砂質シルト	なし	あり	旧表土直下の堆積、瓦・円礫（径5～10cm大）を多く含む。
	Ⅲb	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	あり	あり	瓦・円礫（径5～10cm大）を多く含む、整地層上面。
	Ⅲc	10YR5/3	にぶい黄褐色	細砂質シルト	あり	あり	整地層。地山ブロック（径1cm大）を少量含む。
	Ⅲd	10YR6/6	明黄褐色	シルト	あり	あり	整地層。地山ブロック（径0.5～1cm大）を少量含む。
	Ⅲe	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	あり	あり	整地層。地山ブロック（径1～3cm大）を少量く含む。
	Ⅲf	10YR8/8	黄橙色	シルト	あり	あり	整地層。地山ブロック（径1～3cm大）を少量含む。
S-1407	1	10YR8/8	黄橙色	粘質土	あり	なし	旧表土層、地山ブロック（径1～3cm大）を多く含む。
	2	10YR2/1	黒色	粘質土	あり	なし	縞状の堆積、粘質を有するが、締まりのない軟質土。
	3	10YR8/8	黄橙色	粘質土	あり	なし	円礫（径10cm大）、地山ブロック（径0.5cm）を多く含む。
	4	10YR2/1	黒色	シルト	あり	なし	②層と類似する腐植土が浅く筋状に堆積。
	5	10YR8/8	黄橙色	粘質土	あり	なし	地山ブロック（径1cm大）を多く含む。
	6	10YR3/1	黒褐色	細砂質粘土	あり	なし	表土に類する混ざりの少ない腐植土。砂礫を含む。
	7	10YR7/6	明黄褐色	細砂質シルト	あり	なし	混ざりの少ないシルト層。
	8	10YR5/6	黄褐色	細砂質シルト	あり	なし	Ⅱa層と同様の砂礫混じりシルト層の流れ込み埋土。
	9	10YR6/8	明黄褐色	粘質土	あり	なし	地山ブロック（10YR8/4浅橙色粘質土、径2cm大）を少量含む。
	10	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	あり	なし	地山ブロック（10YR8/4浅橙色粘質土、径1～3cm大）を多く含む。
	11	10YR6/6	明黄褐色	粘質土	あり	なし	地山ブロック（10YR8/4浅橙色粘質土、径1cm大）を少量含む。
	12	10YR5/8	黄褐色	粘質土	あり	なし	地山ブロック（10YR8/4浅橙色粘質土、径1cm大）を少量含む。

第15表　８トレンチ（南壁）土層註記表

遺構	層位	土色		土質	土性		備考
		土色No	土色		粘性	しまり	
	Ⅰ	10YR1/2	黒色	細砂質シルト	なし	なし	表土。
	Ⅱa	10YR1.7/1	黒色	泥炭土	なし	なし	攪乱、埋土のほとんどが炭化物で占めている。
	Ⅱb	10YR5/2	灰黄褐色	砂礫土	なし	なし	砂、礫（径0.5cm大）を多数含む。
	Ⅱc	10YR4/1	褐灰色	細砂質礫	なし	あり	礫（径2～3cm大）を多く含む。
	Ⅱd	10YR4/1	褐灰色	細砂質土	ややあり	ややあり	腐植物を多く含む旧表土。
	Ⅱe	10YR6/8	明黄褐色	粘土	あり	あり	地山ブロック（径1cm大）を多く含む。
	Ⅱf	10YR2/1	黒色	細砂質シルト	ややあり	あり	旧表土（腐植土）、溝S-1408の直上埋土。
S-1407	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質シルト	あり	あり	溝埋没後の窪地を地山ブロック（径1～5cm大）にて整地。昭和28年の10円硬貨出土。
	2	10YR2/1	黒色	細砂質シルト	あり	あり	旧表土、溝S-1408の直上埋土と同様の腐植土。
	3	10YR2/3	黒褐色	細砂質土	あり	あり	溝S-1407下層埋土。
S-1408	1	10YR2/1	黒色	細砂質粘土	あり	あり	溝S-1408埋土。円礫（径5～10cm大）を多く含む。



第24図　８トレンチ出土遺物実測図

第16表　８トレンチ出土遺物註記表

図版番号	種　類	遺物番号	遺構・層位	重さ（kg）	特徴（計測値の単位はcm）
第24図　1	塀平瓦	184	S-1413	(2.84)	水切り、焼成：良好、胎土：粗、長さ（27.8）、幅（23.0）、厚さ3.5
第24図　2	塀平瓦	187	S-1413	(1.70)	水切り・釘穴、焼成：良好、胎土：密、長さ（27.1）、幅（17.1）、厚さ（3.2）
第24図　3	冠伏間瓦	166	S-1413	(1.38)	焼成：良好、胎土：粗、長さ（25.4）、幅（11.0）、高さ10.7
第24図　4	駒瓦	77	S-1413	(1.46)	駒巴、長さ（23.4）、最大幅8.9、高さ13.5
第24図　5	駒瓦	180	S-1413	(1.76)	長さ（35.0）、最大幅9.1、最大高10.5
第24図　6	駒瓦	88	S-1413	(1.10)	長さ（29.9）、最大幅（釘穴部分）9.2、高さ（7.3）、推定全長：約47

たことから現代に属する。Ⅲ層はⅢa～Ⅲfの６層があり、Ⅲaについては、にぶい黄橙色細砂質シルトである。円礫（径10cm大）や瓦片を少量含むが、軟質である点から、近世の盛土と考えられる。Ⅲbについては、円礫（径10～15cm 大）や瓦片を多く含んだ近世の遺物包含層である。Ⅲc～fについては、地山の黄褐色土、岩盤等（径0.5～１cm 大のブロック）を混入している整地層である。Ⅲf層より下位の地山等の堆積については確認できなかった。

（2）遺構と遺物

S-1407（溝）　調査区中央にて北西から南東方向へ直線的に延びる溝である。整地層であるⅢb層上面より切り込まれている。規模は検出長が3.5m、幅1.1mを測る。埋土は主に黄褐色シルトである。下層にてピットS-1413・1414・1415を検出した。溝の性格としては、塀の柱穴を有する布掘溝と考えられる。

S-1408（溝）　調査区南側にて北西から南東方向へ直線状に延びる溝である。盛土であるⅡb層上面より切り込まれている。溝の全形は調査地外に継続しているため不明であるが、検出長が2.5m、幅0.5mを測る。断面形状はⅢ状を呈する。埋土は黒色細砂質シルトである。埋土内には多数の円礫（径５～10cm 大）を含んでいた。

S-1409（ピット）　調査区の北西端にて検出した大型のピットである。盛土であるⅡc層上面より切り込まれており、楕円形を呈する。規模は長径1.1m、短径0.5mを測る。埋土内には多数の円礫を敷き詰めた状態で含んでいた。上面よりコンクリートとレンガの小片を検出した。

S-1410（ピット）　調査区中央の北よりにて楕円形のピットを検出した。整地層であるⅢb層上面より切り込まれている。規模は検出径0.6mを測る。埋土内には多数の円礫（径10cm 大）と数点の瓦片を含んでいた。

S-1411（ピット）　調査区中央の南よりにて検出した。平面形状は円形を呈し、盛土のⅢb層より切り込まれている。規模は直径0.35mを測る。埋土内には少量の円礫（径10cm 大）と小片の瓦を含んでいた。

S-1412（ピット）　調査区南西端にて円形のピットを検出した。整地層であるⅢb層より切り込まれている。規模は検出径が0.4mを測る。ピットの埋土は黄褐色シルト、埋土内には径10cm 大の円礫と瓦片を含んでいた。

S-1413（ピット）　調査区北西側の溝S-1407北端にて検出した。溝上層のにぶい黄褐色土層より切り込まれている。平面形状は楕円形を呈し、規模は直径0.4m、検出深さ0.5mを測る。ピットの埋土は黄褐色シルトである。埋土内からは、残存良好な瓦片が多数出土した。ピットは布掘状を呈することから、塀に伴う柱穴の可能性がある。

S-1414（ピット）　調査区中央の溝S-1407床面にて検出した。平面形状は南北方向に長い楕円形を呈し、規模は長径0.58m、短径0.32mを測る。ピットの埋土は、地山のブロックを少量含んだ黄褐色シルトである。出土遺物は確認できなかった。遺構の性格はS－1413と同様の布掘状を呈することから、塀に伴う柱穴の可能性がある。

S-1415（ピット）　調査区南東端の溝S-1407床面にて検出した。平面形状は歪な円形を呈し、規模は直径0.3mを測る。ピットの埋土は、にぶい赤色シルトである。出土遺物は確認できなかった。遺構の性格はS－1413・1414と同様の布掘状を呈することから、塀に伴う柱穴の可能性がある。

S-1416（ピット）　調査区北西側にて検出した。南側は溝S-1407によって切られているが、平面形状としては円形を呈するものであろう。規模は推定直径が0.5m、検出深さが0.55mを測る。ピットの埋土は、白色系の地山ブロックを含んだ明黄褐色シルトである。出土遺物は確認できなかった。遺構の性格はS－1413・1414と同様の布掘状を呈することから、塀に伴う柱穴の可能性がある。

出土遺物　Ⅰ層：軒平無文軒桟瓦１点、塀平瓦１点　Ⅱ層：三引両文軒丸瓦１点、平瓦１点　S-1407：丸瓦１点、三巴文軒桟瓦１点、軒桟瓦１点、駒付平瓦１点　S-1408：三巴文軒桟瓦１点　S-1413：冠伏間瓦６点、面戸瓦１点、塀平瓦３点、駒付平瓦11点、駒巴瓦13点

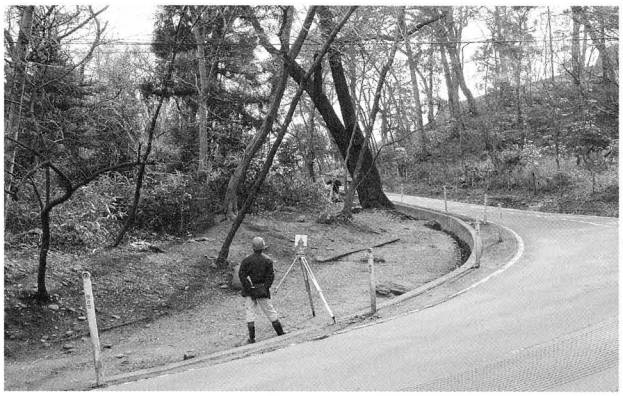
Ⅳ　土塁の測量調査について

土塁の測量調査としては、沢門跡南側土塁と中門跡北側土塁の２か所を対象として実施した。測量調査範囲の面積は約1,835㎡である。作業は平成18年３月１日から13日にかけて実施した。

測量の主たる目的としては、土塁の上に繁茂する樹木や降雨等の影響で、土塁の形状に経年変化が発生する恐れがあるため、現況の形状を詳細に記録することである。また、今後予定されている登城路の整備に向けても必要な詳細なデータを取得することである。

本報告書においては、測量図版の掲載は紙幅の都合等の関係で割愛した。

第25図　中門跡北側土塁（北から）



第26図　測量作業風景（北西から）

Ⅴ　まとめ

1．大手門から本丸北面石垣下に至る市道青葉城線の左側に連なる高まりは、『仙台城跡３』や『仙台城跡４』等で「土塁」や「土塁状の高まり」等と表現され、複数の仙台城下絵図に描かれた登城路の土塀に伴う土塁と考えられてきた。しかし今回の調査では「土塁として構築された」ものとの確証を得るにはいたらなかった。道路側は近代以降の道路・側溝の敷設工事で大きく削平されたことが明らかであり、むしろ斜面際が土塁状に削り残されたか、もしくは削平された土砂が盛られたものと思われる。

2．３～６トレンチで検出された土塁状高まりを構成する礫層は、意図的に設置されたものであり、それが土塁構築を目的としたものではなく、登城路の構造や変遷に関わる重要な遺構である。その性格解明は今後の調査・検討に待ちたい。

3．４・５トレンチのサブトレンチ下層で検出したⅣ層、特にⅣb層以下の土層は、地山の洪積世堆積層を削って谷側を大規模に埋めた整地層であることが判明し、登城路に関わる基盤整備に伴う造成土である。

4．７トレンチの小石敷き面は、狭い調査区内のみの検出であるが明瞭な遺構面をなしており、その密度や安定度から石敷き遺構と認められ、沢門周辺または登城路の路面整備の状態を示している可能性が高い。

5．８トレンチ検出のS-1407（溝）と、S-1413・1414・1415（ピット）は、沢門に取り付く塀の布掘り溝と柱穴の可能性があり、S-1413出土の瓦群は、駒瓦・塀平瓦を多く含み、塀上部に葺かれていた瓦と考えられる。

6．２トレンチⅡ層下層の桟瓦群は、他所からの移動廃棄は考えにくく、登城路土塀に使用された近世後期のものであり、築城初期の塀には駒瓦・塀平瓦が使用され、何度かの補修・建替えが行われていたと考えられる。

7．４～７トレンチの、土塁状高まり上面や斜面に露出していた長径数十cm程度の石材は、すべて表土もしくは近代の盛土に載っており、城郭に伴う遺構を構成するものではない。

図版１　１トレンチ全景（北西から）

図版２　１トレンチ遺構検出状況（南東から）

図版３　２トレンチ全景（南東から）

図版４　２トレンチ遺物出土状況（南東から）

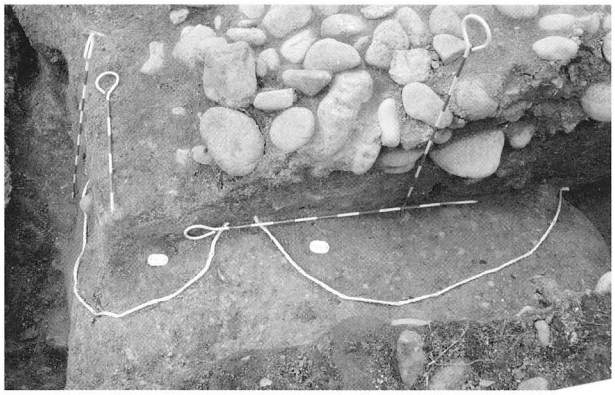
図版５　３トレンチ全景（南から）

図版６　３トレンチ遺構検出状況（西から）

図版７　４・５トレンチ調査風景（南東から）

図版８　４トレンチ全景（南西から）

図版９　５トレンチ全景（西から）



図版10　５トレンチ遺構検出状況（南東から）

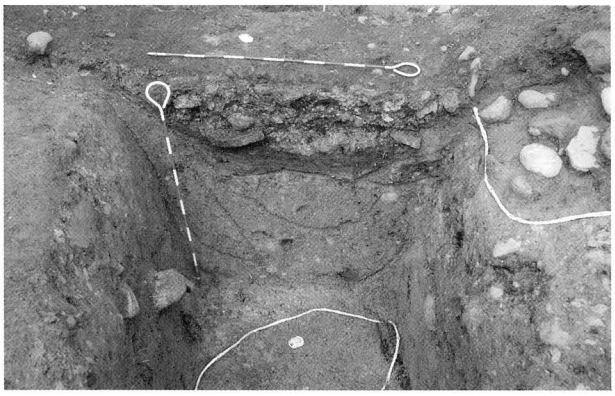
図版11　６トレンチ全景（西から）

図版12　７トレンチ全景（北から）

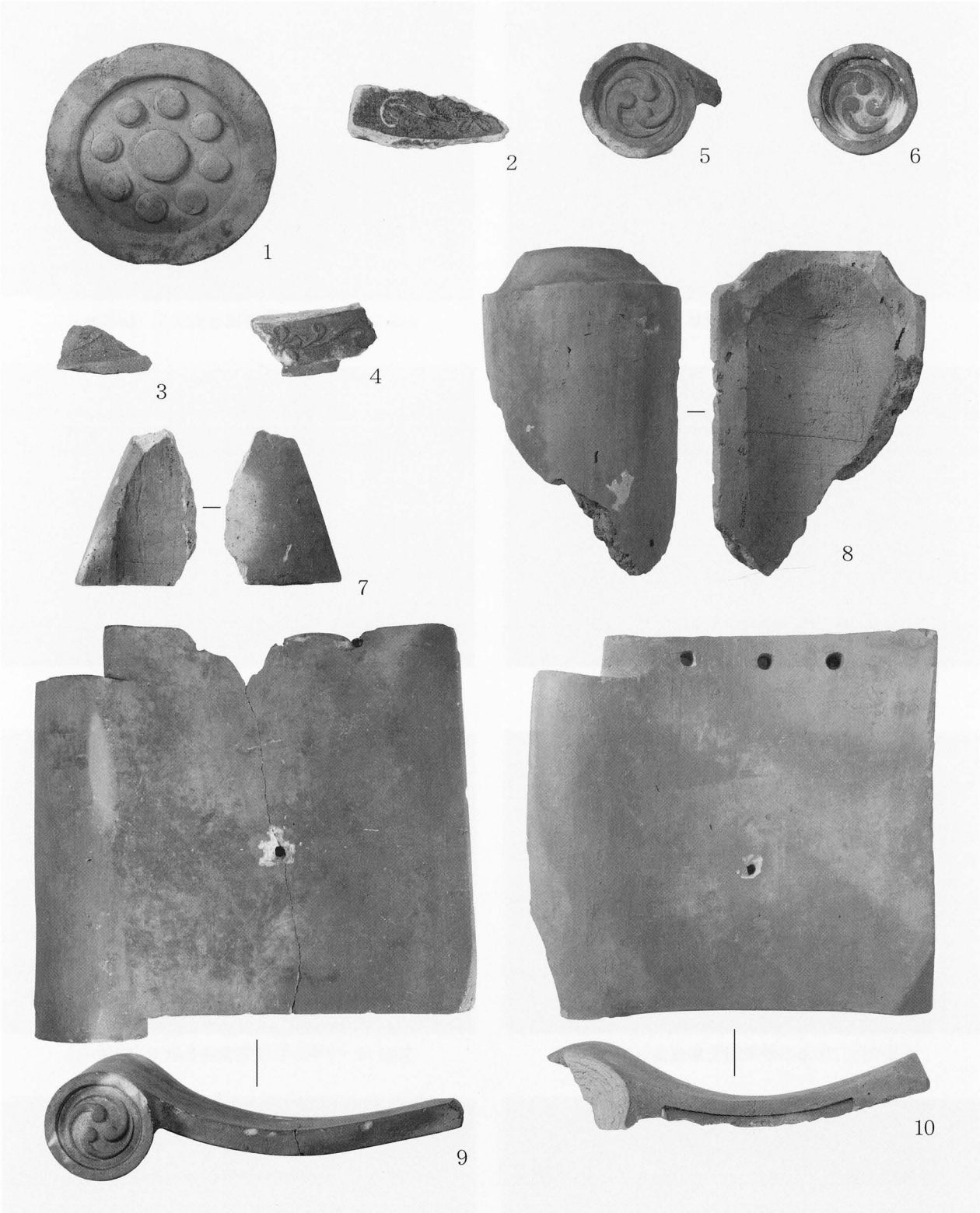
図版13　７トレンチ北壁土層断面（南から）

図版14　７トレンチ石敷検出状況（北から）

図版15　８トレンチ全景（北から）

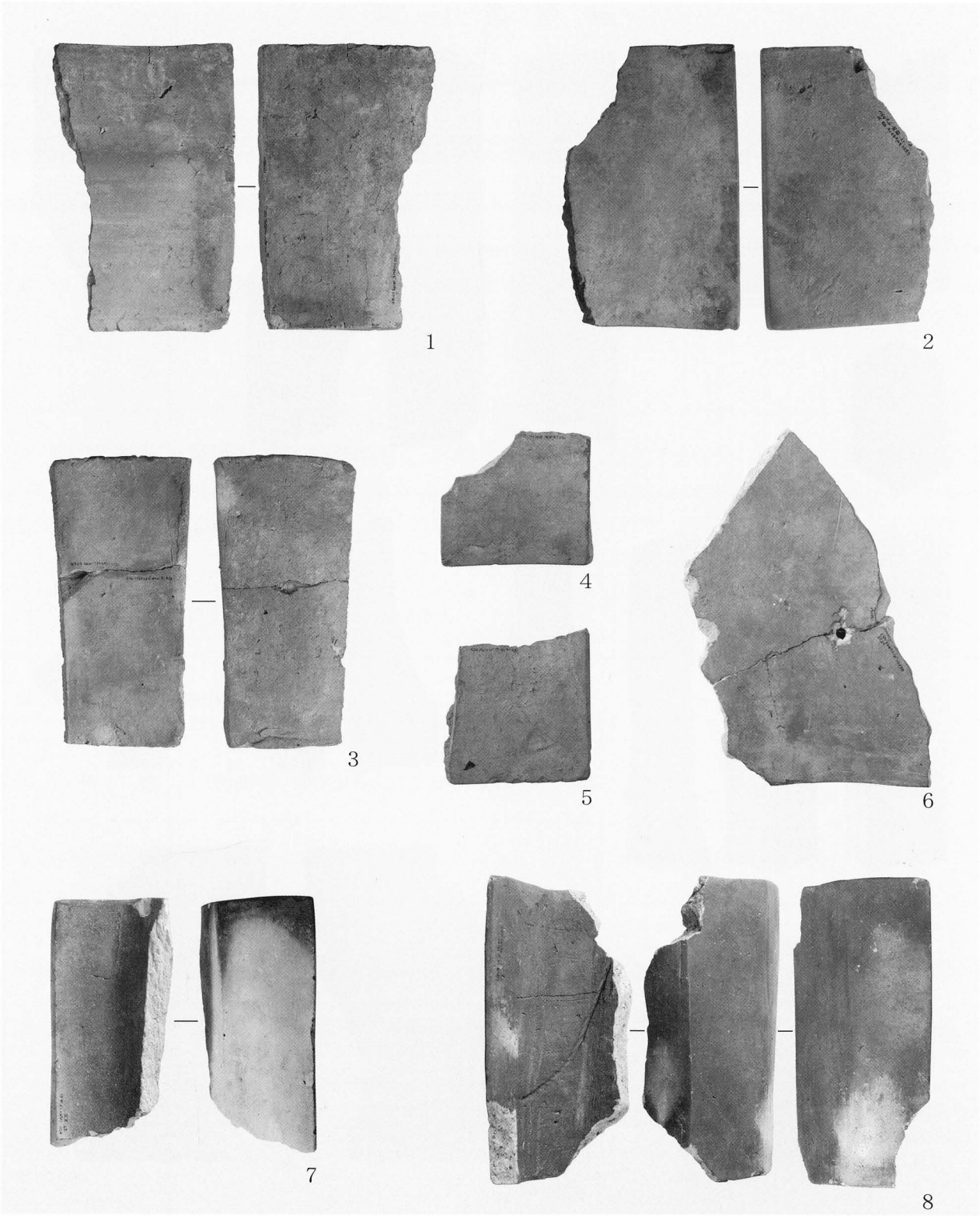


図版16　８トレンチS－1407土層断面



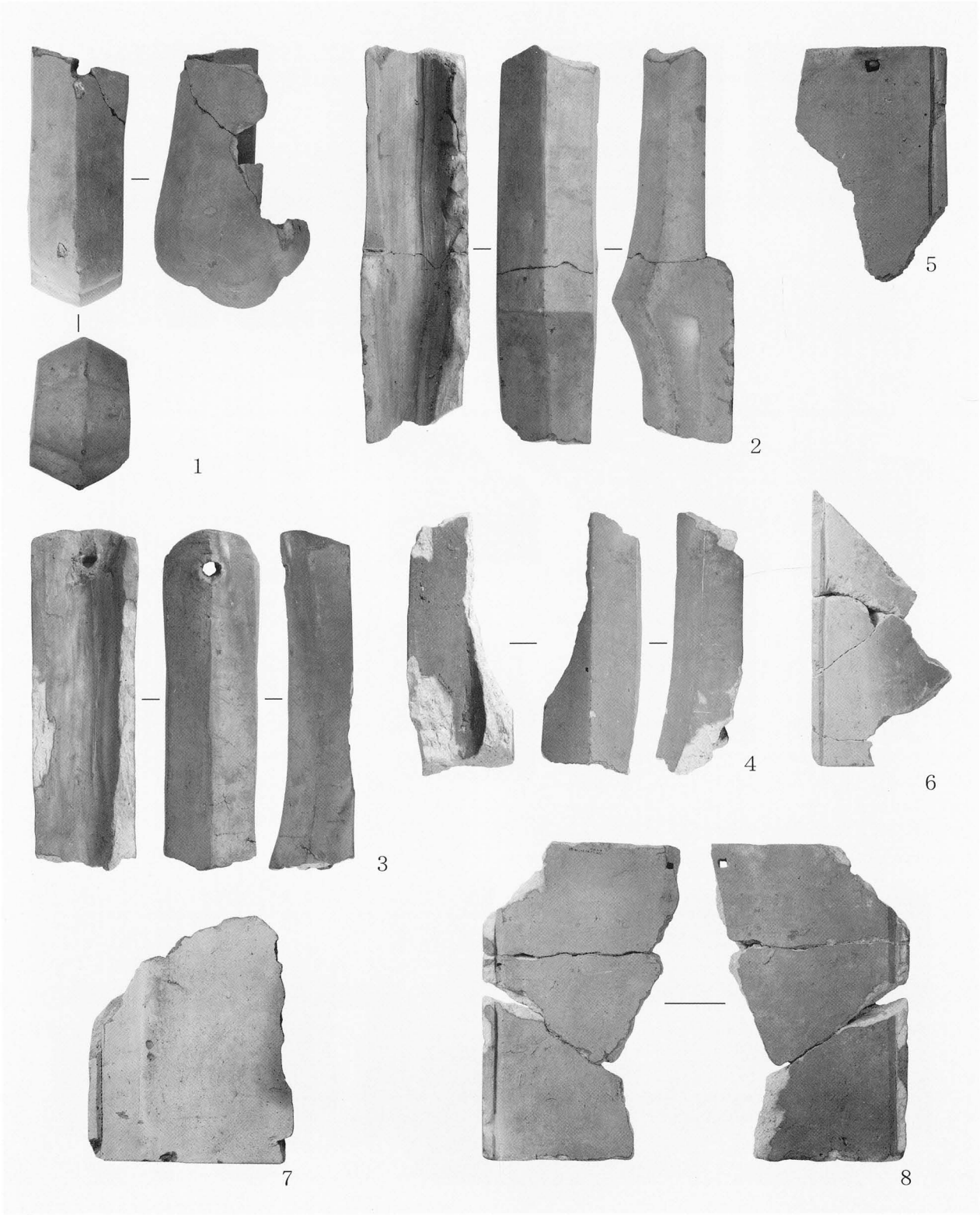
1. 九曜文軒丸瓦　7トレンチ　No.121　第22図1	6. 三巴文軒桟瓦　1トレンチ　No.8　第10図1
2. 桔梗文軒平瓦　4トレンチ　No.93　第16図1	7. 輪違瓦　6トレンチ　No.97　第20図3
3. 軒平瓦　5トレンチ　No.103　第18図1	8. 丸瓦　6トレンチ　No.156　第20図1
4. 桔梗文軒平瓦　3トレンチ　No.67　第14図1	9. 三巴文軒桟瓦　2トレンチ　No.42　第12図2
5. 三巴文軒桟瓦　3トレンチ　No.66　第14図2	10. 軒桟瓦　2トレンチ　No.46　第12図4

図版17　　出土遺物写真(1)



1. 平瓦　6トレンチ　No.107　第20図2	5. 熨斗瓦　7トレンチ　No.161　第22図2
2. 熨斗瓦　1トレンチ　No.29　第10図2	6. 平瓦　3トレンチ　No.130　第14図4
3. 熨斗瓦　3トレンチ　No.61・70　第14図5	7. 冠伏間瓦　2トレンチ　No.21　第12図1
4. 熨斗瓦　3トレンチ　No.31　第14図3	8. 冠伏間瓦　8トレンチ　No.166　第24図3

図版18　　出土遺物写真(2)



1. 駒巴瓦　8トレンチ　No.77　第24図4	5. 塀平瓦　8トレンチ　No.184　第24図2
2. 駒瓦　8トレンチ　No.180　第24図5	6. 塀平瓦　4トレンチ　No.185　第10図4
3. 駒瓦　8トレンチ　No.88　第24図6	7. 塀平瓦　8トレンチ　No.187　第24図1
4. 駒瓦　1トレンチ　No.181　第10図3	8. 塀平瓦　2トレンチ　No.182・183　第12図4

図版19　　出土遺物写真(3)

報 告 書 抄 録

ふりがな	せんだいじょうあと　とじょうろ　いちじちょうさ
書名	仙台城跡　登城路　１次調査
副書名	平成17年度　調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第300集
編著者名	橋本顕嗣・古川久雄・村尾政人
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8607　仙台市青葉区国分町3丁目7-1　TEL022-214-8544
発行年月日	2006年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	調査地点	コード 市町村	コード 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
			4100	1033			
仙台城跡（せんだいじょうあと）	宮城県仙台市（みやぎけんせんだいし）青葉区川内地内（あおばくかわうちちない）	登城路跡	北緯 38°15′00″	東経 140°51′35″	2005.12.9 ～ 2006.3.13	75㎡（発掘調査）1,835㎡（測量調査）	重要遺跡の遺構確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡	城館跡	江戸時代	土坑 ピット 溝	瓦・磁器	沢門跡南側土塁を発掘調査し、石敷き遺構とみられる整地層を検出し、土塀所用の瓦が出土した。

仙台市文化財調査報告書第300集

仙台城跡
登城路1次調査

— 平成17年度　調査報告書 —

2006年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目7－1
文化財課　022（214）8554

印刷　株式会社　建設プレス
仙台市青葉区折立三丁目2－10
TEL 022（302）0177